月刊
オパーリン王国
２０１２年４月
号
オパーリン

序文

「よう、元気か？」って会ったときによく言うけども、僕もよく言うけども、考えてみれば元気かどうかってそう簡単に判断できることじゃないよね。普段からテンション高い人とかは普段と比べて元気がなくても、他の人と比べれば普通くらいかもしれないし、その逆もまたしかりだしさ。なんて思ってみる。もう４月も終わりだねぇ。気づかないうちに桜も散ってたなあ、お花見は行かなかったよ。でも、お花見のシーズンあたりに何の関係もなく上野に行ったら、人でごった返してたなあ。喫茶店も満室だった。こういう種類の「ごった返し」ってさ、自分がそれに加担している時はそのウザさに気づかないけど、自分と何の関係もないイベントの時は途端に腹立たしくなるものである、という感じのエッセイ書く人って結構いるよね。入学試験の国語の問題文に出題されるようなやつ。僕はそれに加担している時でも周りの人がウザいけどなぁ。就活とかでもさぁ、人が多すぎてウンザリして「俺以外全員帰ればいいのに」って思うもの。

就活って言えば、全然内定出ないなあ。その気配がない。こんなもん書いてないで履歴書を書けよ、って話なんだけどね。まあ、いいのさ。ゴールデンウィークだしさ。しっかり休んで気持ち切り替えて頑張ります！と「意識の高い学生」っぽいことを言ってみる。けっ、馬鹿馬鹿しい！

とは言うものの、心はそれほど荒んでいない。驚くほど穏やかな気分ですらある。「野に下り、落ちぶれてみるのもまた芸の肥やしだなあ。」何て思ったりする自分がいる。こういう所が良くないんだろうな、必死じゃないところが見抜かれちゃうんだろうな。

最近、稲垣足穂の「弥勒」っていう小説を読んだんだけどもさ。壮絶貧乏になっちゃって、でも働かなくて、「飯食いてえ」ってほざく小説なんだ。ああいうのってカッコイイな、って思っちゃうもんな。父ちゃん、母ちゃん、ごめんよ。

さて、今月の月オパ（第７号ダゼ！）は、多良鼓氏と鶴首氏はお休みです。来月は書いてくれるかな、どうかな？という感じですが、まあ「勝手に」やっている雑誌ですので、頑張ることもなく好きなペースでやっていこうと思います。

弦楽器イルカさんが３月号掲載の小説『四月に見る夢　Ⅰ』に続き、『四月に見る夢　Ⅱ』を寄稿してくださいました。また、「終わりを持たない文章のあとがきにかえて。」という題の文章も寄稿してくださったので、「エッセイ」に掲載しました。出すぎたマネだとは思いますが、素晴らしい小説を本誌に寄稿してくださったことへの精一杯の謝意を込めて、感想を書きました。こっちは別に読まなくてもいいよん。

あと報告はね、東町健太氏が今まで月オパで書いてくれたエッセイをまとめた作品集を近々刊行する予定です。今東町氏にあとがきを書いてもらっているところです。今後もどんどん月オパで書かれたものを書籍化していきたいね。雑誌っぽいじゃん。

では、月オパ４月号をお楽しみください。

（２０１２年４月２９日）

不定期連載小説　第二回

『四月に見る夢　Ⅱ』

執筆者　弦楽器イルカ

私はナイフを握り締め、深い眠気に誘われてゆっくりと目を閉じる。
クリック・

●

朝、飛び起きたとき、イヤな夢をみたと思った・しばらく動けないほどイヤな夢だった・
でもしばらくすると、それがどんな夢だったのか・思い出そうとしたけれど、まるでつるりと滑るノブのように・いったいどんな夢だったのか・そもそも、僕は本当にそんな夢を見たのだろうか？ よくわからない……
それでも、不安がまとわりつくような汗と胸騒ぎだけは今も消えずにあるから、僕はやはり夢をみたらしい・それに、イヤな夢をみるだけの十分な理由はあるのだ・十分すぎるほどだ・

もうちょっと寝ていようかとも思ったのだけれど・あの物語の続きを書いてみようと思い、やはり起きることにした・カーテンを開けると、昨日と変わらない雪・白い世界の向こうに遠く・積み上がった瓦礫の頭が見えた・慣れ親しんだその光景になぜだか少しホッとした・まだ大丈夫だ・
静かだった・あの日から何一つ変わっていないみたいだ・相変わらず人はいなかったけど、でも今は雪の朝なのだ・いつもだってこの時間には・時計を・見てから思い出した・そうだ・時計はもう止めてしまったのだ……
うまく言えなかった・言えそうになかったし、試す気にもなれなかった・胸にせり上がってくる何かを目をつむってやり過ごして、もう一度だけ外に視線を・救いを求めるみたいに・でもムダだった・もう外には、何もなかった・何もかもが変わったのだ・世界の始まりを予感させる輝きが今では・殺伐とした静物画みたいな風景の中で色褪せて・何もかもが終わった・もう何一つ始まりはしない・いや・そんなもの初めからなかったのかもしれない・
辛くなった・目眩みたいで、床に膝をついて・でも涙は出なかった・やっぱり出なかった・もっと、もっと本気で生きてきたなら、きっと泣けたんだ・僕は今まで、生きていることの大切さなんか、ひとっつも気づかなかったのだ・

ただ思い出す・もしあの時・降り出した雪に危険を感じた人々と一緒に逃げていたら・僕は助かったのだろうか・それとも・あるいは・でも・
僕はあの日もぼんやりと雪を眺めていた・この町に留まりたいと思ったワケじゃない・逃げる理

由と場所がなかっただけだ・そして雪が町を真っ白に染めた後では、逃げ出すにはもう遅すぎた・これまでもずっと・いつもそうだった・
　そこに山がある・僕はそこから何かを拾い出すチャンスが与えられる・そこには確実に、努力して探しさえすれば手に入る何かがあるのだとわかる・だが僕にはそれを見つけ出すことができない・周りにいる僕と同じ年恰好の子どもたちは次々に自分の山から何物かを掘り出しては、意気揚揚と引き上げて行く・僕はそれを横目に山を掘り続け、気づけば一人取り残され、遥か山裾に夕日が真赤に滲む・そして僕は瓦礫の一部となった自分を受け入れた・
　ずっと長いこと、たくさんの物を畏れ、逃げ続けてきたと感じる・僕の手に入る物は残りカスみたいだと思った・寄せ集めのバラバラな断片を抱え・ちぐはぐに溶接された継ぎ目は脆く、一つ一つがいびつに膨らんだり縮んだりしている・誰かが整理し直さなければならないが、僕にはできそうもなかった・ただ繰り返す毎日に、僕はまた同じような僕を重ねるだけ・そうして諦めて佇む眼前で山は掘り返されぬまま、赤い夕日を受け奇妙な形の影を作った・
　それが、あの瓦礫だ・後回しにしてきた断片の関の山だ・

　――地鳴りのようなその音はまるで、地球の終わりみたいに聴こえた・
　地下から穴を開ける様な大きな音・驚いて一階へ駆け下りようとして・階段の途中で、眼下・ボコッ・玄関に巨大な穴が開いた・本当に穴を掘る音だったのだ・
「こんにちは」
　大きなゴーグルと、鼻の頭に小さな泥を付けた・キュートと形容されるような・ポニーテールの少女がこちらを見て微笑んでいる・こんにちは？
「ねえ、話は後よ、もちろん質問したい気持ちは分かるけど。今は時間がないの、現実に追いつかれてしまうから。物語の速度を緩めちゃダメ。いい？ あたしについて来て」
「は？」
　思わず声が裏返って、それが一年ぶりの会話だと気づいて焦る・
「ねえ、あたしは未来から地下水路を辿ってあなたに会いに来たの。未来のあなたが、過去のあなたを瓦礫の町から救いたくて地下潜りのマスターに頼んだの。それであたしが派遣されたってワケ。地下水路の秘密をあたしに伝授した髭の長いマスター・コウ・レナイ曰く、全ての道はローマへ、全ての地下水路は未来へってことね。だからこの地下水路を抜ければ、未来のあなたが出口へ導いてくれるはずよ。さ、一緒に行きましょう？」
　その時、穴から勢いよく小さな塊が飛び出してきた・「ワン！」と一声吠えたそれは小型犬・ビーグル犬か何かだ・
「申し遅れたわね。あたしはルナ。この子はムゥよ。つまり、ちょっとしたスピンオフってワケ」
「え？」
「本当はあたし、『月』の後は『密室』に出る予定だったの。でもイマイチ気乗りがしなくてね、ゲームのスピードに。現実に追いつかれそうでさ。だからこっちへ出て来ることにしたの。それで密室にはお決まりの犬が出てこなくて、こっちには二度登場するってワケ、あたしがこの子

をこっちに連れて来ちゃったから。ま、不在の在ってことよ。なんせ集大成だしさ、こっちは。犬が一匹増えたり減ったりするくらい多めに見ろって話じゃない？」
　彼女が何を言っているのか・僕には・
「いいのよ、大した話じゃないし。会話は現実に追いつかれるから。それよりもあなたをここから救いたいの。ねえ、時砂を避けて逃げましょう。未来のあなたがきっと導いてくれるから」
　なんだかよくわからなかった・僕は行く気になっているのだ・
「わかった。行くよ。ジャンパーを着るから待ってて」
　僕は慌ててジャンパーを羽織り、ボタンの金具を留めた・
　パチン。

○

　その音で現実へ連れ戻されるように、私は夢の中で目を覚ます。
「ねえ。もうすぐ少年がやって来るわ。心の準備は出来た？」
　彼女の声は悪びれずに明るい。
「準備？」
「その右手のナイフで刺し殺すの。あなたは忘れてないわ」
　握りしめた右手の重みに私は気付いていた。だがそれで誰かを刺そうなど、しかも過去の自分を殺そうなどとは……。
　考えられない。
「ねえ。人間は区別されているのよ。少し前に、偉い人や家族が瓦礫の町に移り住むって議論もあった。『風評』を払しょくするために。でももちろん、そんなのは鼻で一笑されるただの極論、実現なんてしなかった。つまりこの世界には、危険な場所に住み続けていい無名の人間と、安全な場所に隔離される有名な人間がいる。同じ人間でも名前によって、そういう区別がちゃんとあるのよ。
　あの少年はだから、あなたに殺されていい人間なの。そしてあなたは、あの少年を殺していい人間なのよ。戦争と同じ。人を殺すことが称賛に値するのよ」
　それこそ極論だ。あり得ない。
「いいえ、殺しなさい。未来を救うために。みんなそうやって過去を殺したんだから。あとはあなただけなの。自分だけ手を汚さないのは卑怯よ。あなたが殺さなかったら、みんなが迷惑するのよ。それが絆でしょ？」
　違う。それは絆じゃない。
「いいのよ。ただのフィクション、嘘なんだから。あなたがあの少年を出会い頭に刺せば、あとはあの瓦礫の町に過去を封じ込めて時砂が全てを真っ白に染め上げるだけ。何もない白紙の世界へ還るわ。みんな見て見ぬフリをしている、この瞬間も。ホラ、わかってるでしょ？ 誰もがやっていることなのよ」
　私にはわからない。握りしめたナイフがどんどん重くなり、持っていられなくなりそうだ。しかし指に吸いついたようなそれは手放すこともできず、私は重さに耐えきれずへたり込む。

「ねえ。あなたはただ目をつむって、そのナイフを構えるだけよ。そこに少年が飛び込んでくる。過去のあなたは、本当はもう苦しみに耐えきれなくて殺されたがっていた。そうでしょ？」
　そうかもしれない、と私は思う。しかし、そうだとしても……殺してどうなる？
「あなたは晴れてこの新しい世界の一員になれるわ。誰一人瓦礫にとらわれることのない、夢の未来が語られる世界」
　だがそれでも、瓦礫が消えるワケじゃない。あの町に残り続ける。
「そうね。過去の遺体と一緒にね。でも過去を殺した新しい世界から遠巻きに見る瓦礫は、まっ白でとても綺麗よ。喪失から再生へと未来だけを見つめ、美しい復興のビジョンが語られる世界のいったい何が悪いの？」
　わからない。ただ今でも覚えている。当時の私はひとり、窮屈な部屋の中で将来の自分に向かって、ここに閉じ込められていた日々を決して忘れるなと訴えかけていた。いつかこの部屋を出て今よりも日当たりの良い場所で暮らせるようになりたい。しかしそうなったら、今こうして苦痛を味わっている過去の自分はただの踏み台として将来に忘れ去られる。
　瓦礫の町に横たわる多くの遺体から、同じ言葉が聴こえる気がする。私たちを忘れるな。お前の笑顔の裏に眠る亡霊の存在から決して眼を逸らすな、と。
「人はいずれ死ぬわ。生きている今をめいっぱい楽しむことが、そんなにいけないことかしら？」
　犠牲になった声はどうする？
「誰のせいでもない。もともと世界はそういうふうに出来ているから。だから、あなたはもう刺すしかないのよ。ねえ、はじめから知っていたでしょ？ ホラ、足音が聴こえるわ。もうすぐよ。少年はもうすぐそこの曲がり角まで来ている。あなたは黙ってナイフを構えるだけ。だって、今までもあなたは見捨てて来たんだもの。この世界のたくさんの犠牲者たちを。穢れにまみれたその手を今さら引っ込めることはできない。さあ、立ちなさい。目をつむって、ナイフを掲げるのよ」
　そして私はゆっくりと立ち上がり、目を閉じる。ナイフを胸元に掲げ、切っ先を虚空に向ける。足音が二つ聴こえる気がする。なんて早いんだろう。この物語は。
　私が10代の末に考えていた物語は本来、こんな物ではなかった。だが今、私はこの物語の中であの頃の自分と対話している。少年の息遣いが聴こえる。私は、ゆっくりとナイフを前に突き出した。
　クリック・

●

　僕は薄暗い地下水路を、ルナと名乗る少女の後ろについて走っている・その足元にはムゥと呼ばれるビーグル犬が、小さな体躯で激しく上下に跳ねながら・じゃれるみたいについていく・彼女のポニーテールと犬の尻尾がまるで、仲の良い双子みたいな揺れ方で・つい面白くて見とれてしまう・

「ねえ、教えてくれない？」
　後ろを振り返らず彼女が僕に尋ねる・
「え、何を？」
「あなたが今書いている物語。未来のあなたが、過去に書いていた物語のことを気にしていたの。ちょっと気になるのよ。もうあたしには読む時間がないから、今教えてほしいの」
「いや。大した物語じゃない。夢の話だよ」
「どんな夢？」
「父親が死んだ娘と旅に出る夢。部屋に帰ると一人娘がソファに横たわっていて、脈がなく死んでいる。慌てて玄関から飛び出すと、外で娘が待っている。父親は娘を抱きしめ、手をつないで旅に出る。しかし、一瞬で見失う。
　その後、黄色い象に救われて砂漠を歩く。そこは砂時計の中で、光る砂が降っている。やがて砂時計が大きな音を立てて回転し、父親と象はシェルターへと避難する。
　そのシェルターの中は過去の自分の家で、そこで父親は過去の自分、少年と出会う。少年はひどく絶望していて、いつか自分がその絶望に呑み込まれて巨大な怪獣になることを恐れている。そしてそうなる前に父親をナイフで殺そうとする。間一髪、象が父親をそこから助け出す。
　シェルターを出た父親は、象と砂漠を再び歩き出すと、何者かが迫る足音が聴こえる。それが何か象に尋ねると、象は逆に父親に尋ねる。私はいったい何のために生まれたのかと。父親には質問の趣旨が理解できない。だが象は質問を変えず、父親に再び問う。考えろ、私は何のために生まれたのか。父親は考える。そして、象が死ぬことに気付く。象は答える。私が希望の象徴としてこの夢の砂漠に生まれたのであれば、私はあなたのために死ぬのだろう。それならいい。見ていてほしい。そして象は巨大化して破裂し、心臓から血が飛び散り、光る砂の色が赤く染まる。
　赤い砂の降る砂漠で、足音の主である黒ヒョウの群れが現れる。しかし、黒ヒョウの群れは父親に挑みかかる前に紙片のように燃え上がってしまう。希望を含んだ血の砂が黒ヒョウの絶望を焼いたのだ。そして炎の中から二足歩行でマントをつけた黒ヒョウがゆっくりと現れる。無駄だ。私の絶望はお前の一部だ。私を焼くことはお前にはできない。
　父親は思う。私の中に絶望があり、それが私を殺そうとしている。でも私はもう、殺されてもいいような気がしている。そのとき、娘の声が聴こえた気がする。
　娘は少年に会いに行く。少年はひとりで、誰かに会いたくて、恋をしたがっていることを娘は知っている。そして娘は、少年に好きだと告白する。少年はそれが嘘であることに気づく。ただ嘘でもその言葉の持つ甘さから逃れることができず、娘がその言葉で少年を孤独から救おうとしているのを感じる。そして、少年は娘の望みを叶えるために利用されることを受け入れ、巨大な絶望の怪獣となる。
　絶望の怪獣は、黒ヒョウをあっさりと踏みつぶす。そしてその脇で自分を見上げている黒い点、父親を踏みつぶさずに去って行く。
　そこで紙芝居は終わり、最後に娘がおしまいと手を振っている。父親は現実の娘が一年前に死んでしまった事実をそこではじめて受け入れると、ゆっくりとその夢から目覚めるんだ」
「複雑な物語ね。でも、なんとなくいい話って思うわ。なんで完成しなかったの？」

「いや、違うよ。こんなふうにプロットを整理できなかったんだ。今まで書いたのは断片がもっとごちゃごちゃに入り混じって、そもそも物語の体をなしてなかった。自分でも驚いてる。初めて他人に話したせいだろうか。まさかこんなにプロットが整理されるとは思わなかった。すごく不思議だよ」
「それはね。未来のあなたが過去を塗り替えようとしているからよ」
「え？」
「そのプロットは未来のあなたが考えたの」
「どういうこと？」
「未来のあなたが今、過去に介入しているの」
「どうして？」
「過去の自分を殺すために」
「え？」
「もうすぐよ、その角を曲がったら。ホラ」
　次の瞬間・不意に大きな衝撃を胸元に受け、僕は倒れた・
　パチン

○●

　いつか私は、歩いている街角のど真ん中で突然、行き先を見失なうようになった。人の流れに立ち尽くし、どこにも行けずその場で座り込んでしまう挫折感を必死でこらえた。店の軒先には無数の自販機が並び、喉を通った瞬間に味も匂いも忘れていく食べ物は吐いて捨てるほどあるのに、ここには私が欲する本当はなかった。
　それは私のせいではない。この世界を一変させる本当が今はまだ見つけられないだけで、それはずっと誰のせいでもなかったんだ。
　ひとり、帰りついた部屋で灯りを点け、ベッドに腰を下ろし、疲れた身体を癒すように両手で顔を覆う直前に固まった。
　そんなことしてなんになる？
　遅かった。私は手を下ろそうと、だが下ろせず。
　そんなことしていったいどうなるんだ？
　その声がやってきて私をがんじがらめにした。眼前に浮かぶ手はそこから上げることも下ろすこともできず、ただワケのわからないままじっとりと汗が、まずい、こんな手の平を見つめたまま意味もなく固まる人間なんて。
　必死で、手が震え、顔が歪み、喉の奥を塞ぐ重石のような息を吐き出そうとかすれる声が、あ、ぁあ、ぁ……それは声にならず、バカみたいに大口をあける自分がひどく恐ろしくて、必死になって。
「…ぁ、あぁあああ！！」

　それ以来、何かするたびに僕の中で問いかけが起こった・それは本当にしたかったことなのか？ 何か感情を表に出そうとして、僕は何度も固まった・おい、お前は今本当に楽しいのか？ お前は今本当に笑っているのか？
　僕には、自分が笑っているという事実を確認するだけで精いっぱいだった・何度も何度も確認した・笑っているから、僕はおかしいに違いないのだ・ただ僕はもう、感情に必要とされてはいないのだと思った・
　忘れてしまいたいことは忘れられるようになり、しかし覚えていたいことも同様だった・あらゆることを忘れていく中で、今度は記憶の出来事にも必要とされていないと気づいた・それはつまり、自分自身が必要ないのかもしれなかった・だが、だとしても、もちろん、自分を不必要とするその手段を試すことはできなかった・なんとなくだ・でも・しかし・

　おそろしいほどはっきりとした手ごたえが、ナイフを握る手から伝わってきた。
　ゆっくり目を開けると、眼前で胸から血を流し倒れているのは少女だった。
　私が刺したのは少年ではなかった。後ろから来た少年は少女にぶつかって、その後方に倒れていた。痛みをこらえる少女のうめき声が、地下水路内に呪詛のように反響する。
　何も言えなかった。あのとき、フィクションだからと彼女は言った。これはしょせん文字列が生み出した殺人だ。それならば、クリック一つでデリートできるはずだ。私はゆっくり目を閉じる。眠気が全身を包み込む。もう一度起きた時、私は過去を刺し殺し、新しい未来を手に入れようと決意する。
　クリック。

○

　ゆっくり眼を開けると、眼前で胸から血を流し倒れているのは少女だった。
　いや、違う。それはさっきデリートした光景だ。これはフィクションで、ただの夢なんだ。
　クリック。

○

　ゆっくり眼を開けると、眼前で胸から血を流し倒れているのは少女だった。
　違う、少女じゃない。私が刺したのは少年だ！ 私は過去を殺したいんだ！
「違うわ。あなたは過去を殺したいとは思ってない」
「違わない。私は過去を殺したいんだ。この少年を！」
　私はそう言って、血まみれのナイフを右手に、少年に向けて振りかざした。
「無理よ。あなたには殺せない。たとえフィクションでも、いいえ、あなたが書くフィクションだからこそ、理不尽な殺人を犯したいとあなたは思わない。過去の自分をナイフで刺し殺すなんてあなたにはできない」
　倒れている少年が驚いた顔で私を見つめている。私は見返すことができない。なぜこんなこ

とを。私の疑問を見越したように、彼女がゆっくりと続ける。
「あたしは、あなたと少年を引き合わせたかったの。このままだとあなたも無自覚に過去を殺してしまうから。誰もがあなたと同じように、自覚もなく過去を殺そうとしている事実に気付いてほしかった」
　だが私は、確かに少年を刺し殺そうとした。どう償っても、許されることではない。
「死にたくない」
　少年の言葉に私はうつむく。少年が私を見上げたまま・僕はその人を見上げながら、本当に本心の言葉を・弱音がやっと口をついて出てくる・
「苦しいよ。生きることが、とても。でも死ぬのはイヤだ。だからどこにも逃げられない。助けて。殺さないで。過去に閉じ込めないで。未来に逃げたい。殺さないで。僕が本当に未来まで、あなたまで生きられるって教えてよ。いつかあの物語を完成させられるって。今はダメでも、将来ちゃんと夢は叶うって。約束してよ。僕は生きられるって。絶対大丈夫だって。約束してよ」
　私はこたえることができない。誰も、その問いにこたえることなどできるはずがないと思う。
　だがそこで、少女は笑った。まるで何ごとも起こらなかったかのような会心の笑みとそれに続くこたえに、私は目と耳を疑う。
「大丈夫よ。あたしが守るから。この物語が、あなたを殺さない。これからも無数の物語が、ここから続くたくさんの人々の祈りが、あなたたちを生かす。信じて。あなたたちの絶望を、私たちは知っているから。大丈夫。フィクションでも人はそう簡単に死なないのよ」
　そう言うと彼女はのっそりと、まるで亡霊のように立ち上がる。そして、胸元から何か、赤く濡れた厚い、辞書のような物を取り出した。真中にざっくりと切れ込みが入っている。
「ね、フィクションなの。嘘って言ったでしょ？」
　そんな、古典的な……
「あたしが登場したってことは、そんなシリアスに物語は終わらないってことよ。ねえ、それよりも聴かせて。その声を。未来のあなたと過去のあなたに、一緒に語ってほしいの。過去を閉ざそうとする世界の人々に風穴を開けるために。外の世界へ通じるこの地下水路から、本当の想いを叫んで。ねえ、あなたに語ってほしいの。過去も未来も切り捨てることのない、新しい夢の物語を。
　その音は決して終わりだけじゃなくて、始まりの音でもあるのよ。さあ、目を覚まして。黄色い象を平原に還すために、あなたはいったいどんな物語を描くの？」
　そして僕・私は、新しい物語の夢を描くためにワープロ・パソコンを再び立ち上げる。
パチン・
クリック。

○

　それはなんてことはないある春の晴れた昼下がりで、私はちょっとした用事から家に帰ってみ

るとソファの上で娘が死んでいた。
　リビングの真ん中にある白い大きなソファを斜めに占拠して、私の一人娘がうつぶせに倒れていたのだ。白いカーテンからうっすらとまるで毛布のように、黄色い陽射しがその腰の辺りにかかっていた。
　急いで駆け寄ったが手首は驚くほど冷たく、持ち上げると指がだらりと垂れた。ごくりと唾を呑む音がまるで部屋全体を呑み込むように響いた。
「どうして……」
　娘はまだ六歳で、そんな簡単に死んでしまえるような歳ではなかった。持ち上げた指から伝わる冷えた骨をつまむような違和感が異様さを伴い、不安が鳥肌となって全身を駆け巡り私はその手をゆっくりと戻した。肌の白さが目から離れなかった。
　娘はすぐに起きなければならなかった。すぐ起きるはずだ。私は待った。
　眠そうな目を開けて私を見つめ、右手人さし指の腹で右目をこすりながら、その小さな鼻腔で新しい呼吸を始めるはずだ。すぐに小さな口が大げさに開き滑稽なほど大きなあくびをして、何事もなく満足げな視線で世界を見渡す瞬間を、私は待った。
　だが、娘は起きなかった。眠ったように死んだまま、私が待っていることなど意に介さず、娘は死に続けた。
「ねえ、どうしたの？」
　不意に背後から呼びかけられ、私は答えることができない。
「ねぇ、いったい何があったの？」
　再び妻が私に問いかける。私は答えない。正確には、答える言葉を持たない。どのように答えようと、彼女は理解しないのだ。彼女はただ自分の現実を私に理解させようと、問い正しているにすぎないからだ。
　どこで間違えたのだろう。いったい何が本当だったのだろう。どうしてこうなってしまったのだろうと自問自答する私に、妻はもう一度背後から、ゆっくりと尋ねる。
「ねぇ、どうしてこんなことにならなくちゃいけないの？」
　慌てて右手にジャケットをつかみ、靴を履くのももどかしく玄関のドアを開ける。
　ドアの外へ飛び出すと、数メートル先に自宅用の白いポストがある。いつもの風景だ。
　その脇に、娘が立っていた。どこかで待っていてくれるだろうとは思っていたが、まさか目の前に立っているとは思いもかけず、私はしばし呆然と娘を見つめた。それはポニーテールを下げたいつもの上目づかいで、私は思わず笑みがこぼれた。
「やぁ、待ったかい？」
「ちょっとだけ、待った」娘はそう言って笑った。
「そうか」
「どうしたの？」
　どうしたの？ というその問いに、私は言葉もなく、本当にどうしたのだろう。
　答えのないまま、私は娘に駆け寄る。膝をつき、その両肩をできるだけやさしく、しっかりと抱く。娘は不思議そうな表情のまま、新しい息を吸う。娘は生きている。静かに息を吐く。彼女は呼吸していて、生きている。

私は娘を両腕に抱いたまま、きつく目を閉じて祈るようにつぶやく。
「おかえり」

○

第二回

「その「声」は「誰」の声？」

執筆者　東町健太、オパーリン

・企画趣旨

　とある大新聞に日がな寄せられる読者の「声」。その声は一体誰の声なのか？何を代弁しているのか？国民、労働者、女性、弱者、子供、はたまた単に「我々」という曖昧な共同体意識か？気になって読んでみれば、これまたびっくり、とんでもない・・・、いやいや思わず溜息がこぼれるほどのすばらしき投稿ばかり。

　ということで我々オパーリン王国では東町健太氏を委員長にすえ、「『その「声」は「誰」の声？』委員会」を結成した。当委員会では毎月、これらの投稿の中から特に秀でた投稿について勝手に表彰し、講評を行うこととする。

・『その「声」は「誰」の声？』委員会　メンバー紹介

　選考委員長　東町健太

　選考副委員長　オパーリン

・２０１２年４月度　結果発表

〈大賞〉

「駅ナカ保育園、人気というが」

（保育士　女性　４８才）

　駅ナカ保育園が増えているという。子育て世代には便利で人気も高く、鉄道会社にとっても沿線住民へのサービスとして重要とか。

　わざわざ駅から遠い保育園に送り迎えするなんて時間の無駄。保育時間だってなるべく短い方が良い。鉄道会社だって駅利用者の確保にもなるし、ありきたりのテナントよりきっとイメージもいいだろう。お互いの利益が一致している。

　でも、何か引っ掛かる。子どもはそれでいいのかな？

　人が行き来する駅って落ち着かないんじゃないかな？近くに公園はあるのかな？太陽にあたり土や水に触れられるのかな？子どもの成長過程において無駄だと思えることが、後から影響が表れたり、大事な意味を持ったりするような気がする。あまり大人の都合で考えないでほしい。

　でもそんなこと言っても好環境の保育園はなかなか入れないし、共働きしないと生活できない。大人にきっと余裕がないんだね。

〈講評〉

・東町健太（選考委員長）

この文章を読み終えてずいぶん長い間、溢れる涙を止めることができなかった。人の心に潜む悪や醜さを全て受け入れ、そして全てを許す。イエス・キリストはこんな人だったのではないかと思う。

筆者は誰かを批判するようなことはしない。まるで自らが思い、感じたかのように文書をつづる。自らが裁かれることによって他者の罪をあがなおうとする姿勢はまさにキリストだ。

限られた時間の中でそれでも子どもを保育園に通わせようとする親心。それに協力しようとする鉄道会社。その関係を「お互いの利益」と斬って捨てる冷酷さ。

「人が行き来する」「落ち着かない」保育園で「近くに公園」がなく「太陽にあたり土や水に触れ」られない環境で育った子どもの将来は暗いとでも言いたげな論調。差別にすらつながりかねない思考回路。それをあたかも子どもの立場にたっているかのようにみせかける卑怯さ。

まさしく全て「余裕のない」大人の考えだ。しかし筆者は誰かを批判するのではなく、自らを醜く描くことによって、密かにそのような考えを持つ者を悔い改めさせようとしているのだ。なんという愛に満ちた方なのだろうか。当然、大賞に選ばせていただく。

・オパーリン（選考副委員長）

最後の一段落、そこに集約されていると思う。普段母親たちがよく口にする「子供のために」という言葉の虚妄を見事に引っぺがしてくれている。「要するにテメエの都合だろうが！」と言いたいのだろうに、そこをグッと堪え、やさしい口調で「余裕がないんだね」と、あくまでも自発的に気づいてくれるのを待っている。気づく筈もない母親達だからこそそうなってしまったのだということを百も承知で。

〈佳作〉

「自宅で楽しくそろばん３級に」

（小学生　女性　１１才）

私は自宅でそろばんを楽しく練習しています。お母さんに勧められて、８歳で１０級の教本から始め、今では３級になりました。

３級の試験は先月ありました。一ヶ月くらい前から毎日３０分くらい練習し、そろばん塾に通っている子どもたちと一緒に受けました。結果は一発合格。塾に通ったことのない私が３級だなんて、信じられないほどうれしかったです。

私はスイミングや英会話の教室、学習塾にも通っていません。でもクロールは２５メートル泳げるし、英語も学校の授業でいくらかはしゃべれます。だから、習い事に行かなくてもできるようになることはたくさんあると思っています。

たくさん習い事に通っている友達もいますが、あまり楽しそうではありません。いやいや通っていると聞いたこともあります。

習い事は楽しんでやるものだと思います。私は毎日１０分、そろばん２級と暗算の教本で楽しく練習しています。もっと上達したいです。

〈講評〉
・東町健太（選考委員長）
　小学生にしてこれほどしっかりした文章を書くというのは驚きだ。まず基本がしっかりしている。二つの意見や考え方を対比させて検証する際、まず一方のいい面ばかり取り上げ、次に他方の悪い面ばかりを強調するというのはアジテーションの基本である。そのあたりが非常にしっかりしている。
　塾や習い事に行かなくてもいろいろなことができる自分がいる一方、友達はいやいや塾や習い事に通っている。おそらくはそろばん塾に通っている子どもの中で３級の試験に落ちてしまった子もいるだろうし、スイミングに通っているにもかかわらず２５メートルも泳げない子だっているかもしれない。スイミングにもそろばん塾にも通っていない筆者が彼らを見たときの優越感、爽快感というのは想像に難くない。このような文章を読めば誰だって習い事の無意味さ、滑稽さを悟るにちがいない。
　ちなみに私事だが、私も小学生のときそろばん塾に通っていた。自分が日に日に上達していくのがうれしく、とても楽しかった記憶がある。
・オパーリン（選考副委員長）
　「才能ない奴が幾ら金使っても無駄。」この誰もおおぴらには言わないが厳然たる事実を、１１歳の少女が言ってのけた。成金の虚しさを斬る模範的なブルジョワ批判、「小さな活動家」の誕生である。人生は短い。自分の正しさだけが正しさではないかもしれない、などという自家撞着は全くもって無駄なことである、と私もこの頃に気づいていればと悔やまれる。
　猛烈活動家の輝く未来に心からの賛辞を送る。

〈佳作〉
「「政治家の家」へ行ってほしい」
（中学生　女性　１４才）

　３月３１日夕刊の「政治家の皆さん、福島を感じられますか？」を読んだ。山梨県の現代美術家の男性が、福島県南相馬市の警戒区域の少し外側に政治家専用の休憩所「政治家の家」をつくり、国会議員約１００人に招待状を郵送したが、まあ返事はないという。
　私は昨年一月、ニュージーランドを旅行した。最も印象に残ったのはクライストチャーチ大聖堂だ。しかし帰国後、現地で地震が発生。損傷した大聖堂は解体されると聞き、悲しい気持ちになった。再建する時がくれば貢献したいと思う。
　ニュージーランド地震はもう世界的なニュースではないかもしれない。しかし、旅行で訪れ、住む人々や美しい街の景観を知る私にとって、ニュージーランドは忘れられない国となった。
　政治家の皆さんは「政治家の家」へ行ってほしい。そうすれば被災地への特別な思いが生まれ、被災者の皆さんの気持ちに寄り添った仕事ができるはずだから。

〈講評〉

・東町健太（選考委員長）

少女の「政治家の皆さん」への厚い信頼感にほのぼのとさせられる文章である。筆者は「政治家の皆さん」が「政治家の家」へ行きさえすれば、「被災地への特別な思いが生まれ、被災者の皆さんの気持ちに寄り添」うことができると心から信じているのがわかる。筆者本人は地震にあったニュージーランドにおいて最も印象に残っているのは現地の人々についてではなく「クライストチャーチ大聖堂」、つまりただの建物だといいきり、またどのように「被災者の皆さんの気持ち」に寄り添っているかというと「悲しい気持ちになった」「再建する時がくれば貢献したいと思う」程度にしか寄りそうことができていない。というかこれはほぼ寄り添っていない。このように、「被災者の皆さん」の気持ちにいっさい寄り添うことのできない自分を自虐的ともとれるような筆致で描きながら、それでも「政治家の皆さん」ならきっと、きっと寄り添うことができると筆者は語る。

人を信じる。その素晴らしさを筆者の文章を読んで再認識させられた。筆者の純粋な主張に心が洗われた気さえする。筆者のひたむきな姿勢への賛辞を込めて、佳作とさせていただいた。

・オパーリン（選考副委員長）

現代の『青春の蹉跌』だ。「政治家の家」に言っても何も感じないでいることのできる人間こそが、この日本においては政治家の資質があるとみなされているのだ。それではいけない、と誰もが分かっていながらも、そんなことがまかり通ってしまっている。

筆者は近い将来、その事実に打ちのめされることになるかもしれない。その時、ただただ無垢であった筆者がどのようううに昇華するのか、私はそれに期待して本作を佳作に推した。

第四回

「生き恥を、晒して足掻く、私かな」

執筆者　オパーリン

・５「インポ。そして、生まれなかった水子達（とお詫び）」

「さっきから黙って読んでいればダラダラ、ダラダラ、ダルダル、ダルダル、と。手前（てめえ）の事っていうか愚痴ばっかり書きやがって。まじでつまらないわ。こっちはお前のことなんてどうだっていいんじゃ。こんなもん小説じゃねだろ。早く話らしい話を書けや、ボケが！」という読者の声（クレーム）が聞こえてきそうな勢いである。そして僕自身が書いていて、そのような声が頭の片隅から聞こえてきている。が、本作『生き恥を、晒して足掻く、私かな』を書き始める契機、モーチブとなった側の僕（僕の頭の中には色々な人が住んでいて彼らはいつも喧しく喧嘩をしている）は落ち着き払っている。「慌てんな、全て計画通りさ。僕の壮大なプランは着実に遂行されている。」とのたまうている。そして今のところ、僕の中のメインの僕、つまりは意思行動決定権を持っている僕の中のボス的な僕も、本作の提案者である僕の言い分を信頼している。

しかし僕とて、こんな代物をここまで読んでくれている物好き極まりない読者を愛しく思っていることは確かだ。愛している、マジで。だから、できうる事ならば読者のニーズと筆者の欲求とのギャップを埋めたいと思う。しかしながら、今回本作を書き始めるにあたってのテーマの一つとして、筆者の欲求を最優先する、つまりはマスターベーションを完遂する、ということに決めてしまっている。だから、愛しき読者へのせめてもの、せめてもの・・・。あれ。えーっとこんなときになんて言うんだっけ？言葉が出てこねーや。ま、仕方がない。愛しき読者へのせめてもの「アレ」として、先ほどのクレームに対して現段階での出来うる限りの対応をし、本作の今後の展望についても説明しようと思う。

まず、「ダルダルしている、愚痴ばかり、つまらない」に対して。ごもっとも、その通りである。そして残念ながら、これについては現段階では筆者があなた達にして挙げられることは何一つない。精一杯書いており、これが現段階での僕の実力であるからである。が、希望を捨てないでほしい。本作は自身初の長編小説として始動しており、事が予定通りに進めば、かなり長い小説になるはずである。だから、書いているうちに少しは筆力が上達し、ダルダルせずしっかりと、面白くなるかもしれない。愚痴は、消えないだろう。

次に「小説ではない」について。残念ながら、これは小説である。その理由については、前の章（４章）でも予告した「リアリティ」についての章で説明する。で、肝心なのはその「リアリティー」の章が一体第何章になるのか、ということである。現在までのところ、第五章まで書き進めているわけで、当然のことながらこの先はまだ書いておらず、したがってなんとも言えな

いのであるが、今のところの予定では「リアリティー」の章は第９章になるはずである。
「おせーな、おい」という怒号が今確かに僕の耳にリアリティーを伴って聞こえてきたが、安心してほしい。その安心の理由は「話を書け、ボケ」というクレームにも関わってくるのだが、６章と７章はあなた方の言う「話」になる予定であるということである。つまり、次とその次ね。あなた方が期待するような「話」かどうかは分からんが、まあ、せめて楽しみにして、この章だけはダルダルな自己言及、戯言に耐えてくれ。

と、読者への謝罪、言い訳はここまで。でね、何とかかんとかにでもこの章を書き終えなくては次の章にはいけないわけでね。話を戻すよ。
二度の落選、同年代の学生による滅多打ち、そして実は実生活における大失恋（１年間の片思いの後、２週間に３度のプロポーズという愚行、マジで嫌われての失恋であった）によって、全人格を否定された気分になってしまった僕は、ただでさえ殆ど持ち合わせていなかった、なけなしの自信をすっかりと喪失し、人生へのヤル気を喪失し、執筆インポになってしまった。２０１０年、大学３年生の時である。
失意のどん底にあって僕は何をしたのか。そう、それでも小説を書いたのである。マジで懲りないのである。しかしながら、僕が患ってしまった執筆インポという疾病の病状は非常に重篤であった。その結果、何作もの水子、つまりは未完の小説、途中で投げ出してしまった小説、が生まれてしまったのである。酷い、あまりにも酷すぎる。
未完のわが子供たちも、このままでは浮かばれない。ということで、生まれ得なかったわが子へのせめてもの弔いとして、彼らを本作にてお披露目しようと思う。
アーメン。

・６『焦燥、乱痴気』

口。今、彼の目の前には無数の口があって、それらの口達は同時に、開いたり閉じたりを繰り返している。パクパクと、同時に、同じ音を出している。揃いも揃った口々から飛び出した同調の音達は、ただ同調である様にと目論まれて発せられ、それでもその個々の響きに差異を持つ。その結果として音達の集合体であるところの音の塊は、揺らめき、歪み、うねり、空間に響き渡る。
賛美の声々がチャペルに響き渡って、その「場」を満たし、一同揃いも揃って昂ぶっていく。その独特の音に包まれた空間にいると、皆自分の発した声に浄化され、頭の中が空っぽになって、唯唯、褒め称える対象であるところの神と自分が一体になって、おまけに歌っている他の皆さんとも一体になって、何だかこう、たまらなく恍惚となるんだそうな。
そんな、百人はいようかと思われる会衆が同時に一体となって恍惚となっている礼拝堂の中にあって、おそらくは唯一人彼だけは、己の肉体を駆け巡るどす黒い、ぬらぬらとした違和感、不快感、あるいは拭い去れない焦燥感というような類の感情に身を苛まれていた。体中に芋虫がぞわぞわと這い上がってきて、自分の身体を食い尽くされてしまう様な気がして、打ちひしがれ

、彼は今にも叫びだしてしまいそうだった。この福音に満ち満ちたチャペルを、神の慈愛に酔いしれる会衆を、彼らによって発せられているこの賛美の音を、彼は滅茶苦茶に引き裂いてしまいたくて、とても堪らなかった。
「こんなの、う、嘘だぁ。全部ウソだぁー！」
　彼はそう心の中で叫んだ。確かにそう叫んだのだが、力の限りに叫び、繰り返したのだが、その合間合間に絶えることなく発せられる会衆の賛美の声が彼の中に入り込んできて、危うく取り込まれそうになる。言ってしまえば、目の前にある快楽、無我の共振という誘惑に身を委ねてしまいそうになるのだ。
「ああ、そうすればどんなにか楽だろう。もう、何もかもどうでもいいじゃないか。なぁ。」
　彼の中の一部分がそう言って彼を誘う。彼は今すぐにでも、その声の通りにしたいと思う。ああ、ああ、と涎が垂れてしまう程にそうしたい。皆と一緒ににこやかな笑顔で歌い、頭がパッパラパーになって気持ち良くなってしまいたい。
　ただ、そう思えば思う程に、それとは逆の方向に、それとは拮抗した力で彼の手を引っ張るもう一人の自分がいる。
「やめとけ。こんなのは全く持っておかしい、ってちょっと考えればわかるでしょうが。目先の快楽に惑わされちゃいかんよ。いつもいつも言ってるじゃないか、そんなものに救われるくらいなら、死ね、死んじまえって。」
　双方から手を引かれる形になって、彼は引き裂かれそうになる。いや、もはや引き裂かれてしまっていると言っても差し支えはないのかもしれない。もう痛くて痛くて、彼は何も決める事ができない。ただ待つしかない、裂けて真二つになるその瞬間を。その時に自分がどんな行動をするのか、それ自体はもうどうでもいい、と彼は思う。決断よりも引っ張り合いによって生じているこの耐え難い痛みの方が早急に解決すべき課題になってしまっていて、完全に趣旨を穿き違えてしまって、
「あー、もう早く終われ。」
　彼はもはや唯それだけを強く願っている。「痛み」それだけがあって、俺は今ここにいると実感できるのかもしれないが、もうもしかしたらいなくても良いのかもしれない、と彼は思っている。

　サンサンと光り輝く太陽、その下には青々と映える木々、クッキリと晴れ上がった空にさわやかな微風。これらが一緒くたになって、気持ちの良い春の陽気とでも言うのだろうか。まあいい。とにもかくも、天気の良い春の日差しの中、午前中の礼拝の終わったチャペルからは人がゾロゾロと出てきている。大抵の者は誰かと連れ立って、おしゃべりに興じながら出てくる。ニコニコと、朗らかに、この心地よい春の日にはまさにうってつけ、お似合い、というような表情をしている。
　そんな中、この陽気とも、慈愛に満ちた会衆とも、まったく持ってそぐわない陰鬱な表情をした表情の男が一人、うつろな目をして下を向き、足元はふらつき、息も絶え絶えになりながら、それでも何かブツクサと独り言を喋りながらチャペルから出てきた。会衆の微笑みと対になって、まさに絶望を体現しているかのようである。先ほどの礼拝中に唯一人、言いしれぬ不快感に苦

悶していた彼である。
　彼の名は佐伯一真という。ただ此処では皆からヘレシーと呼ばれていた。名前の由来などは彼には分からない。此処に来た初めの日に祭司バルガイ様がそう名づけたのだ。しかし彼、佐伯一真は自分につけられたこのヘレシーという妙ちくりんな名前を一切受け入れる気になれなかった。佐伯一真というしっかりとした名前を持っているのにも関わらず、ある日突然頼んでもいないのにヘレシーなどという訳の分からない名前を勝手に押し付けられたのだから当然と言えば当然である。祭司バルガイ様だけがありがたい事をしてやったと思って勝手にご満悦、したり顔をしているのである。
　そのため、彼は此処にいる数少ない親しい者には、自分の事を「一真」もしくは「カズ」あるいは「カーくん」などと呼ばせていた。人によって呼び方は色々ではあったが、とにかくこの不本意に押し付けられた「ヘレシー」などという無茶な名前では呼ばせることをしなかった。
　名前に限らず、一真は此処に存在するありとあらゆる物が気に食わなかった。嫌いだった。意にそぐわなかった。いや、「ありとあらゆる」などという表現では生ぬるい、は数少ない友人を除いた全ての物が憎くて溜まらなかった。その為に彼は四六時中、目が覚めているときは殆どいつも、いや、寝ているときでさえ、先ほどのチャペルでそうであった様に、イライラ悶々と不快感に身悶えしていなければならなかった。
「何故こんなにも不快で仕方が無いのか。」
　彼は常々考えていた。しかし、一向に分からなかった。一つ一つの具体的な不快な物に対しては、それぞれそれなりの理由がある。けれども、要約し、それを一つの答えに収束することができない。この場所に漂う胡散臭さ、それは間違いもなくこの肌で感じることができるのだが、一体それは何故なのか、そう考えると上手く言葉にすることができないのであった。
　ただ一つはっきりと言えることは、此処にある全ての物は彼が自分の意志で選択した物ではなかった。全ては何者かによって無理やりに押し付けられた物なのであった。
　そもそも始まりからしてまさにそうであった。彼は此処が何処なのか知らなかった。どうして今自分が此処にいるのかさえも全く分からなかった。「全く馬鹿げている、そんな事があるものか」と思われるかもしれないが、彼の場合はそうなのである。
　ある日突然、気がつけば、此処に「いた」のであった。こんな説明では釈然としないだろう。彼自身も釈然としていなかった。だから彼はことある度に、可能な限りの記憶を掘り起こして、自分が此処に「いる」もしくは「来た」理由を思い出そうと試みていた。
　彼が思い出すことのできた此処に来るまでの、正確に言うならば来る直前までの自分に関する記憶は以下の通りである。

　此処に来る以前、彼は会社で働いていた。その会社は主に健康食品を扱っている会社で、彼はその会社の新規開拓の営業マンをしていたのだった。新規開拓の営業マンとは、言ってしまえば訪問販売の人である。
　来る日も来る日も見知らぬ家のチャイムを押して、無理をしていることが丸分かりのニコニコ営業スマイルを作って、

「美容と健康にとっても良いサプリメントなんです。市販の製品と比較すると有効成分が十倍も入っているんです。ただいまキャンペーンを行っておりまして、こんなすばらしいサプリメントがなんと通常価格の十パーセント引きでお買い求めになれるんです。ぜひこの機会にと思いまして伺わせていただきました。いかがでしょうか？」

とか何とか口からでまかせをまくし立てて、馬鹿高い毒にも薬にもならないような紛い物を売って歩くのが彼の仕事であった。売れても売れなくても精神的に辛い仕事ではあったが、その上殆ど売れなかったのだが、一応は自分で入社試験を受けて入った会社であったのだし、彼は仕事に対してこれと言った不満は感じていなかった。寧ろ、ささやかではあるがある種のやりがいのような物を彼はこの仕事に感じてさえいた。

自分という存在の価値が全て、自分とは何の関係もないような売り上げという数字に変換されること。それは剥き出しの彼自身を、社会という外部から、自分に向けられる多くの見知らぬ者達の目線から隠してくれている様で、彼はそのことに安心感を感じていた。

此処に来る前の最後の日の記憶、それはいつも通りの営業廻りの日の記憶であった。暑い夏の日だった。これを回想している今は春なのだから、秋、冬、ともう二つの季節を此処で過ごしたことになる。我ながらよくもったものだ、と彼は思う。

話を戻すと、その暑い夏の日の昼下がり、その日彼は一個も売ることができず、廻る家廻る家ろくに話も聞いてもらえず、玄関のドアを「ピシャリ」、その繰り返し。まあそんな事は別に目面しいことでも何でもない、だからとりたてて落ち込んでいたと言う訳ではなかった。しかし、それにしても不調ではある。今月（たしか八月だったろうか）も半ばを過ぎたのにまだ一個も売れていない。今月の売り上げのノルマは三十万円だから、このサプリメント（聞いたこともない国に生えているらしい高原野菜から抽出した美容成分がタップリと入っているらしい）が一セット二万円だから、あと十五個は売らなくちゃならない。一日に一個以上は売らないとノルマ達成できないなぁ。ノルマが達成できないと余った分は買い取らなきゃいけないんだから、仮に今月一個も売れないとすると二十万の基本給から三十万引かれるんだから、十万の請求か、困ったな。

などとぼんやり考えながら、ブラブラと歩くうち、住宅街を抜けて駅前の商店街まで来ていた。仕事の性質上、彼は見知らぬ土地を歩くことが多い。この日も、昨日まで廻っていたエリアを諦めてその隣のエリアを廻っていたので、彼にとっては初めて訪れたエリアであった。営業の為の移動費用が自費負担ということもあり、あまり遠出はできないのだが、売らなければそもそも会社にお金を支払わなければならないのだからそうも言っていられない。

世間一般から見ればとんでもない会社なのだろうが実際彼もそう思うが、何より自由であるという所が彼は気に入っていた。商品を取りに行く月初め以外は会社に行く必要はないし、当然出勤時間も退社時間もない。彼にとって入社の決め手となったのはまさにその点であった。

昼下がりと言っても、この駅前の商店街は人影はまばらであった。どちらかと言えば、いや言うまでもなく寂れている。平日の昼下がりなんて何処もこんなものなのかもしれないが、買い物帰り風のオバサンや、杖を突いて歩くおじいちゃん、紺色のバックが取り付けられたキャリーのような物を押して歩くおばあちゃん、そんなのがチラホラといるだけ、町全体にまるで破棄というものが感じられない。いや、生気すら感じられないのだ。まあいい、俺だってそんな風景の構

成要素の一つになってしまっているのだし。でもな、売れるわけねぇな、こんな街じゃ。そもそも生きる気力すら感じられない人たちが美容やら健康やらに興味を持つとは思えないもんな。
はあ。

　そう、彼はこの寂れた商店街同様に暑さにやられてぐだっとして、覇気も生気もなくしてぼんやりとよしなし事を考えるともなく考え、歩いていたのである。ときめきや希望、そういった類のものとは全く無縁ではある。しかし彼は、こんなグダリな感じもまあそんなに悪くはないかなあ、というような気分だった。人生これ前向きといったような人から見れば敗北に違いない状況ではあったのだろうが、そんなに深刻に思いつめてはいなかったのである。
　暑くてそんなに腹も減ってないけど、このまま廻っても売れそうにないし、飯でも食うかなぁ。そう思い彼はパッと目に付いた喫茶店に入った。特に何の変哲もない喫茶店であった。商店街の寂れた雰囲気から外れることなく、なんだか諦めてしまったような、不潔という程ではないが中途半端に古びた喫茶店だった。
カランカラン。
「いらっしゃいませ。」
　店に入るとウェイトレス（というにはいささか古びてしまっているおばさんの店員）に席に通された。このおばさんもまた、店の雰囲気と同様にやる気なく、かったるそうで、かといって別に不満気と言う訳ではない、というような感じであった。
「どうでもいいんだけどね、全部」
という様なてい、といった所だろうか。
　店の奥の方のテーブル席に通された。店内には彼の他に客はいない。散々悪く言ったけれど、こんな喫茶店はダメか、と言われるとそうでもない。例えば、店の日にさらされて黄色くなったクーラーは年月を経ても健在な様で、寒くなく涼しい。それに古い空調独特の図書館のような臭いがして、彼はその匂いが好きだったので、なんとなく落ち着き、好ましい心持にすらなった程だ。都心にあるおしゃれなチェーンの喫茶店などは若い女どもが群がるようにして集まり、キャーキャーと騒ぎ立てていて、まるで居酒屋のような様相を呈しているのに比べれば、この古びていてお客様に快適な休息のひと時を提供しようなどというサービス精神のかけらもない喫茶店の方がよっぽどいいかもしれない。静寂で、それどころか図書館様の臭気によって知性まがいのものまで感じられる。そんなこと言ってるから女の子から見向きもされないのかもな。まあいいさ、どうせ俺はダサい奴だもの。このオンボロで無愛想な喫茶店がお似合いだよ。
　とかなんとか考える時間があったほど暫くしてから、あの仏頂面の太ったオバサン店員が本来は瓶ビールを飲むときに使うコップに入った水を運んできた。コップにビール会社のロゴが印刷されていたので分かった。
「お決まりになりましたらお呼びください。」
「日替わりランチで。」
　そそくさと立ち去ろうとするおばさんの背中に間髪いれずにそう言ってやった。水を持ってくるのが遅かったことへの皮肉の意もこめて言ってやったのだが、おばさんは意に介さない様子で

、「かしこまりました」も言わずにレジの方に戻っていった。オーダー通ったかな、と心配になるじゃねぇか。レジに戻ってから伝票になにやら書き込んでいたので、まあ大丈夫だろうと思うことにした。
　注文した日替わりランチがくるまでの間、特にすることもなく暇なので、テーブルの隅の醤油やらソースやら楊枝やらが置いてある長方形のトレーの脇に立てかけてあったメニューを手にとり、見るともなしに眺める。眺めながらもビールコップに入った水を一気に飲み干す。外が暑かったので喉が渇いていたのだ。古い水道管特有の錆の味、強いカルキの臭い、その後に微かな甘みがした。
　メニューの表面（黄ばんだビニールファイルに紙が二枚入れてあるだけなのでどちらが表かは分からんが）には通常のメニューが書かれている。飲み物はコーヒー（ホットorアイス）、紅茶（ホットorアイス）、オレンジジュース、コーラ‥。食べ物はトースト、スクランブルエッグ、ナポリタン、ハンバーグ、オムライス‥。一通りそろっているが代わり映えもしない。裏面には本日の日替わりランチの内容が手書きで書かれている。今日は唐揚げランチだそうだ。中華じゃねぇか。
　メニューも読み終わり、二回繰り返して読んだけれども、唐揚げランチはまだこない。やることが何もなくなってしまった。唐揚げって上げるのにそんなに時間がかかるだろうか。
　やることがなくなってぼおっとしていると、なんだか眠くなってきた。昨日夜遅かったからな、レンタルビデオの返却日だったから。今日は飯食ってちょっと廻ったら早めに終わりにしよ、どうせ売れねぇし。ふぁあ、ホント売れねえな、才能ないのかもな俺。辞めよっかな、会社‥‥。

　ここで彼の記憶は終わっている。この場所に来る直前までの記憶は唐揚げランチを食べることなく終わっているのである。その次の記憶は彼が目覚めたところから始まっている。果たして喫茶店で眠ってしまったのかどうか、定かではない。あの無愛想なおばさん店員もランチを持ってきた時に客が寝ていればさすがに起こすはずである。ただ、彼にはその先の記憶がない。五百八十円のお代を支払ったかどうかも分からない。この場所に来て半年以上がたってしまった今では、そのこともう確かめようが無い。

　彼が目覚めた時、そこは夜中だった。辺りは真っ暗、目覚めた時は大抵誰もがそうなのだろうが、彼は何がどうなっているのか全く持って分からなかった。ただ暗い、何も見えない、だから夜なんだろう、それぐらいしか思いつかない。

　未完

・７『仮面の国』

　玄関前に掛けてあった真っ黒な手袋を装着し、これまた真っ黒なマスクを被り、武は慎重にド

アノブを回した。ドアを開けた途端に急いで外に飛び出し、即座にドアを閉め、鍵を掛けた。この一連の動作を終えるのにものの１秒とかかってはいないだろう。
　戸締まりを終えた武はキョロキョロと周囲を見渡し、誰もいる気配が無いのを確認して、やっと一安心したようにほっと息をついた。
　この極度の警戒ぶりから、彼が指名手配犯か何かなのではないかと思われるかもしれないが、何のことはない彼はただのフリーターである。そして、今彼が住んでいるオンボロのアパートから外に出てきたのは、バイト先である徒歩二分のコンビニに働きに行くためである。
　たかだかバイト先に行くだけなのにマスクだの手袋だのをつけるだなんて、この男はちょいとおかしいんじゃないのか、と思われる方が大半であろう。しかし、武の住む国ではこの程度の「自己防衛」はもはや常識となっている。　大々的に「言葉狩り」が行われるようになってから、もう何年も経つ。少しでも「おかしな」言動をした者は即座に抹殺されてしまうのだ。。
　しかしながら、今述べた「おかしな」という言葉は、その判断基準が非常に曖昧、個人的、かつ感情的な言葉である。したがって、「おかしな」と言う場合には、「誰にとって」おかしいのかという判断の主体についてはっきりと認識しなければならないのは当然のことであるはずだ。しかしながら、現在武の住む国で行われている「言葉狩り」は、それが「誰の」基準によって行われているのかもはや「誰にも」分からない、という全く持ってわけの分からない状態に陥っていた。
　だから先程武がそうしていたように、ほんの少しの間でも「公」の空間に出歩く際には、自分が何者であるのかという手がかりを絶対に晒してはならないのだ。

　ガシャン。
　武がバイトを終えて、自宅の扉を閉めた音である。それから武は、いくつ取り付けられているのか分からない程の数の扉の鍵を一つずつ順番に掛け、マスクと手袋を玄関のホックに掛けて、部屋に入った。
　ジュポッ。
　武は一人掛けのソッファに腰掛け、机の上に置かれていたハイライトのメンソールの箱から一本取り出し、それにに火をつけてゆっくりと吸い込み、これまたゆっくりと煙を吐き出した。
　フゥー。
　武は久方ぶりにリラックスし、自分の吐き出した煙が即座に空気清浄機に吸い込まれてゆくのを見るともなしに眺めながら、極度の緊張によって体中に疲れが溜まっていたのを感じた。
　今日もまた一人狩られるのを武は勤務中に目撃した。狩られた者は雑誌を立ち読みしていた。もちろん黒ずくめだったので、その者がどんな人間だったのかは分からない。背格好からすれば男だったのではないかと思われるが、体格のいい女だったのかもしれない。
　とにかく、そいつは雑誌を立ち読みしていた。それ以外に特に何か「あやしい」言動をしていたようには見えなかった。しかし、突然、店の入り口からこれまた黒ずくめの人間が数人入ってきて、そいつを連行していった。その間、連行されたそいつも含め全員、終始無言であった。連行された奴が無言だったのは、下手に騒ぐと後々「余罪」と見なされるかもしれないという恐れが働いていたのかもしれない。

　いずれにせよ、いったい何故そいつが連行されたのかは全く分からなかった。「雑誌を読んでいた」ということが「危険思想を持っている」と判断されたのかもしれない。

未完

つづく

「木嶋佳苗さいたま地裁公判傍聴未遂」

執筆者　オパーリン

２０１２年４月１４日（土）、木嶋佳苗の地裁の判決が出るということで傍聴するためにさいたま地裁まで行ってきた。しかし、傍聴といっても聞きたい人全員が聞けるわけではなく、４０席ちょっとしかないのに１３００人以上が聞きたかったそうで、抽選が行われた。世間的に注目が集まる裁判の場合、その規模は別としていつもこんな感じで抽選が行われるそうだ。で、大手のメディアはシルバー人材センターとかで何百人も人を集めて席の確保に奔走するわけだ。

で、今回抽選が朝の８時に行われるということで、５時半つくば駅発の電車に乗って浦和駅にある埼玉地裁まで行ってきた。７時ちょい過ぎに地裁に着いたのだけれども、すでにかなりの人数が待っていたね。それから８時に近づくにつれてどんどん人が増えていって、抽選開始のころにはもう、本当に黒山の人だかりだった。

抽選券代わりのリストバンドをもらって、発表は九時。あっさりと落ちた。事実としてはこれでお終いなんだけれども、これだけじゃルポになりやしない。ということで、当日の会場の様子やなんかも書いていくかな。

まずは、客層というか並んでいる人の構成について。よくニュースとか週刊誌とかの記事では「若い女性が沢山います」みたいな報道がされている。間違いじゃないんだろう、確かに若い女性のグループみたいなのが結構いた。でもそれ以上に印象的だったのは「じいさんばあさんの大群」だ。数十人単位のグループで、観光ツアーみたいに旗持った係員みたいな人が「はい、こっちでーす」的な感じで抽選場に誘導していく。冒頭にも書いたが、大手メディアシルバー人材センターを使って動因した抽選要員である。若い女性よりもこっちの方がよっぽど目を引く光景だったけどもな、初傍聴抽選の僕としては。大体において、傍聴の趣旨って「一般市民に裁判の様子を公開する」っていうものだったのだと思うのだが、実態はその趣旨からはかけ離れてしまっているのだね。

あと、「行った甲斐があったなぁー」と思った出来事は、大川工業の裁判傍聴芸人、阿曽山大噴火さんがいたことだね。「うぉー、本当にいる！！」っていう感じ。テンション上がりまくり。で、そもそも今回傍聴抽選に行ったのは創出版の就活メーリスに「興味ある人は見に来れば？」見たいなメールが届いたのがきっかけなんだけど、途中で創出版の人が阿曽山大噴火さんを紹介してくれて（阿曽山大噴火さんは月刊「創」に連載をもっている）、一緒に写真を撮ってもらうことができた。で、僕は図に乗って、「僕、同人誌やってるんですけど、それに載せてもいいですか？」って阿曽山大噴火さんにお願いしたら「どうぞどうぞ。」って快諾してくださった。めっちゃいい人だ。ということで掲載する。

あとは、抽選が外れて裁判所から出てきたところで、カメラマンを引き連れためっちゃ美人の女が僕に話しかけてきた「テレビ東○です、お話聞かせてください！」と。で、僕はくじに外れたこと、それもコレもお前らメディアが押しかけるせいだということを話し、「何で来たんで

すか」と聞かれたので、裁判傍聴に並ぶ女達がどんな奴らなのか見に来たんだ、つまりは人間観察さ（ニヒリスティックに）的な受け答えをした。で、そのインタビューの途中に小汚い爺さんが乱入しようとしてきた。「おーう、俺も外れちまったんだよ！！一番違いだったんだぜ。惜しいだろ？な？だろ？」と美人キャスターに大声でまくし立て、詰め寄り、カメラの枠内に入ってこようとする。僕はこういうジイさんは大好きだったので「面白い展開になったなあ」とニヤついていたんだけれども、美人キャスターは「マジ迷惑です」という表情を露骨に出し、しかしそんな婉曲表現がジジイに通じるはずもなく、ジジイは相変わらずキャスターに絡みまくっていた。で、僕もジジイに協力し、キャスターに追い込みをかけるため「じゃ、もう終わりでいいですね？」と言って立ち去った。確認していないけれど、あのキャスター、ジジイにケツの一つでも触られてりゃいいのに、と思った。メディアは自ら雇ったシルバーによって仕事を邪魔されたのである。とても皮肉に満ちていて面白い出来事であったし、何よりいい気味であった。

↑さいたま地裁前で阿曽山大噴火さんと記念撮影。何記念かはよう分からんけど。

「木嶋佳苗雑考」

執筆者　オパーリン

・はじめに

先述のルポ「木嶋佳苗さいたま地裁公判傍聴未遂」では僕が傍聴の抽選に行ったことの報告を中心に書いたが、ここではちょっと「事実」からも「事件」からも離れて、もうちっと抽象的な部分について僕なりに考えてみたいと思う。僕は「女がデブでブスであること」とか「木嶋佳苗が気になる女は、何で気になっているのか？」とかそういう部分が気になるので。

・報道の「事実を重ねるほどに、核心から遠ざかっていく」という役割

木嶋佳苗について知ることになったきっかけはメディアの報道である。で、それは殆ど誰しもがそうであろう。だから、木嶋佳苗について考えるにあたっては、この連続不審死事件を報道してきたメディアについて考えることから始める必要があると思う。といっても「報道が事実であるか」とかは僕にとってはどうでもいい。むしろ、事実であるのに、その事実を重ねるほどに「分からない」と感じてしまうこの感覚は何なのか？という点について考えてみたい。

この事件に限った話ではないんだが、殺人事件が起きるとメディアはこぞって「犯人の殺人動機」や「その裏にあった心理」についてまで考える。で、事件においては「何人死んだ」とか「どこで死んだ」とか「何時捕まった」とかは「事実」なんだろうけど、犯人が「何で殺ったのか」は「事実」ではないでしょ。つまり、「心理」と「事実」は別物なんだから、事実を重ねたところで、その心理に迫るはずもないのだ、と僕は思う。そんなのは誰にでも分かるはずなのに、だからその「心理」は別に追求しなくていいのに（できないのだから）、事実だけ報告すればいいのに、何で意味の分からん評論家や専門家が出てきてその「何故」にいらぬ解説を加えるんだろう。

というと「じゃあ、どうすればいいんだよ？文句言うなら代案出せよ！」という声が上がるだろう。んなもん分からん、と答えておこう。僕はディベートに勝つためにこの文章を書いているわけじゃない。本当にただ純粋に、何でかは知らんけども「何故だろう」と気になるから、この文章を書いているんだ。

で、そのメデイアのおせっかいの意味というか意義が最近やっと分かってきた。そこには逆説的な意義があるんだ、きっと。つまり、外す、見当違いなことを言って人々をモヤモヤさせるという役割があるんだと思う。ほら、クイズ番組で絶対に当たらない奴の反対の答えを書いとけば当たるみたいな。人々はそこから、モヤモヤ感じたからこそ、自分で考え始めることができる。だから結果的に、メディアは人々の思弁を助けているんじゃないか、と思う。

だから僕も例に倣って考え始める。

木嶋佳苗の裁判に関する報道を見聞きしていると、やたらと「女性の傍聴者が多いです」と言っている。で、即座にそれすなわち「女性（全体）の関心が高い」みたいにすり替えてしまっている。別に、木嶋裁判に傍聴に来ている女性が「一般的な女性」とか「女性全般」を代表してい

る訳ではないのではないかと思うのだが。
　そこも気になったのだが、もっと気になったのは「じゃあ何故、傍聴女性が木嶋裁判が気になっているのか」ということである。ニュースや週刊誌、ネット、何を見てもその結果としての「関心が集まっている」ということだけが騒がれていて、「何故」の部分が「欠落」している。ここで「欠落」という言葉を使ったことに注意して欲しい。いつもの事件とはちょいと勝手が違う期がするのだ。いつもは過剰に「報道」され「憶測」されるのに分からないのだ。でも、今回の場合は、「結果、事実」についてはいつも通りだが、傍聴女が「何故」気になるのかについては文字通り「欠落」している、言及されていないような気がしてならないのだ。で、その「欠落」は偶然かといえば、違う気がする。意図的だと僕は思うのだ。じゃあ、いったいどういう意図が働いているのか、考えていく。
　メデイアは、傍聴女と女性全般を「＝、等式」で結んでしまっている。まあ、そうしないことには何もものが言えないから仕方が無い部分もあるんだろうけどね。でも、なんか釈然としないんだよな。で、そこが、その釈然としないところこそが、ポイントなんじゃないかと思うんだ。

・女が「デブでブス」であること。
　木嶋佳苗被告が「デブでブスであるかどうか？」は人によって意見が分けれるところであろうが（と、こういう風に書かないと名誉毀損で訴えられるかもしれないのでこう書くが）、一般的な感覚ではそういったカテゴリーに分類される、と仮定してみたいと思う。そしてまた一般的には、デブでブスだと世の男性からも、そして女性からも排斥、阻害される傾向があるのではないかと僕は思う。美のヒエラルキー、というやつである。「そんなものはない、人はみな平等だ」と主張する人はこれ以降僕の文章を読んでいても意味が無いと思うので、止める事をお勧めする。いやね、ブス差別が「ある」と証明することは難しいよ。でもさ、証明できないから「無い」っていったり、そこで考えることを止めるのって「ほんとにそれでいいの？」って思っちゃうんだよね。だから僕は最近は証明したり、リソースを示したり、そういうことに懐疑を覚えている。だからこそ、この文章でも批判を恐れずに、思ったことを証明せず、リソースを示さずに書いていく。よーし、証明しないぞー！！
　で、女の人がデブやブスに生まれてしまうことの悲劇、これは確実にあると思うんだよね、僕は。そして、女の人の気持ちなんて分からないけど、女の人はこの「美のヒエラルキー」にひどく縛られて生きているんじゃないかな、って思うんだ。で、そのことについては、桐野夏生の『グロテスク』がとても参考になると思う。デブだったり、ブスだったりすると、精神的にキツイだけじゃなくて、結果的に社会的にも経済的にも虐げられることになるケースが結構あるんじゃないかと思う。採用されなかったり、結婚できなかったりしてさ。「ビューティーコロシアム」っていう番組あったじゃん、あれとかはそれをすごく如実に表していると思う。
　で、その構造的虐待からの解決方法として、一昔前までは「勉強頑張る」みたいなのが主流だったんだと思うんだよね。こういうと怒られるんだろうけども、田嶋陽子さんとかさ、ああいう層の人達。で、最近は「整形」にシフトしたんじゃないかな。勉強するよりてっとり早いもんね。しかも、ヒエラルキーにおける階級が直接上がるっていう、ダイレクトな解決だもんね。で、

日本においては「整形」って根強い批判があるけど、あれは何でなんだろうって考えると、取り残されたブスの嫉妬であったり、今までブスを虐げることで自分の地位を維持してきた中間層が既得権益を侵されてキレてるみたいなのがあると思うんだよね。美人はあんまり表立っては批判しないような気がする。「整形しても所詮ブスはブス」っていうプライドがあるのかな。

・ヒエラルキーをガン無視した木嶋佳苗被告

　で、なんで木嶋佳苗被告が世の女性の関心を引くのか、ってところに戻るんだけども、彼女はこの「鉄の掟」とも言える美のヒエラルキーをガン無視して、金や男の愛（という特権階級の役得）を手に入れた。みんなこのヒエラルキーに縛られまくってるわけだから、それを華麗に超越した木嶋被告にたいして「何で？どうやったんだろう？」という興味が湧くんだと思う。でも、女性が木嶋被告に対してどんな感情を抱くか、はその女の人が普段「美のヒエラルキー」においてどんな立ち位置、階層にいるかによって変わってくるんだと思う。また、逆に、木嶋被告に対してどんな感情を抱くかによって、女性をある種分類できるんじゃないかとも思う。なんか、リトマス試験紙みたいだな。

　早速試してみよう。木嶋被告に「カッコイイ」とか「私もそうなりたい」というような憧憬の感情を抱く女性は、デブやブスで順当に（という表現もどうかと思うが）虐げられて、金を持っていないし男にも愛されていない女性が多いんじゃないかと思う。でも、僕が傍聴の抽選に並んだ感じでは、そういうタイプの女性は一定数（二割くらい？）いたけれども、大多数って感じじゃなかったんだよな。あくまで印象だけどもさ。

　まあ、とりあえずリトマス試験を続ける。「許せない」と憤りの感情を覚える女性（実はこういう女性も足繁く裁判に通うのではないかと僕は思うのだが）は、ブスによって支えられている中間既得権益層が秩序の崩壊を恐れて怯えているパターンと、取り残されて嫉妬しているブスの二種類だと思う。つまり、「整形」にキレる層と結構被っていると思う。

　と、大きく二分したわけだが、この分類から漏れている女の人もいたと思うんだよね、行ってきた感じでは。この分類のほかに、気になったタイプのグループが二つある。一つは若い（ブスじゃない、超絶美人でもない、そこそこ可愛いくらいの）女性。結構目に付いたんだよね。これは、若くしてヒエラルキーに飽き飽きしているか、単純に「私も金欲しい」と思っているかのどっちかなんじゃないだろうか。もう一つは普通のオバサン。これは、夫の事を「死ねばいいのに」と思ってるんじゃないだろうか。

　と、適当に予測してみたが、なんか見当外れかもしれないな。これを読んでくれた女性読者の方、あなたは木嶋佳苗被告が気になりますか？気になっているとしたら、どうして気になるのだと思いますか？僕にこっそりと教えてくれると助かります。

　えー、来月くらいにですね、３人のパブー作家さん達と今まで水面下で進めてきた大型新企画を掲載できそうなところまで漕ぎ着けました。ということでですね、今回はその予告編、「第０回（プロローグ）」と称して、企画内容の紹介と今までのメールのやり取りを掲載することにしました。皆さん来月号まで期待に胸を膨らませてお待ちくだせぇ。

第０回（プロローグ）

「このままじゃ終われない文学賞」

・企画趣旨
　既存の物語の設定等を自由に変更し、自分好みに結末を書き換える（カヴァーする）企画。一つの課題作品に対して書き手数名と、選考委員を一人設定。選考委員の独断と偏見で一作品に賞を授与する。
・企画概要
　書く形式は小説、箇条書き、企画書風、エッセイ、俳句その他なんでもＯＫ。設定の変更、枚数も自由。笑いでもシリアスでもとにかく自由。
・選考方法
　書いた人の名前を伏せて選考委員に読んでもらう。
・第一回課題作品
　内緒です
・第一回選考委員
　Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅ氏
・第一回作品投稿者
　弦楽器イルカ、戸田環紀、オパーリン

　とまぁ、こんな感じだ。以下、如何にして「コノオワ文学賞」が実現に至ったのか（まだ至っていないが）、我々のメールのやり取りを掲載しよう。なお、関係者のプライバシー保護等のため、僕が原文のやり取りから適宜削除した部分があることをあらかじめ断っておく。

―プロローグ、ＫＯＷ０７１が出来るまで―
　まずやり取りをお披露目する前に、この企画が立ち上がった経緯を少し書こう。そう、それは今年の初め頃、僕は月オパを盛り上げていくためにはもっと執筆者を増やす必要があると考えていた。そこで意を決し、以前からパブーで交流のあった弦楽器イルカさんにメッセージを送った

、「月オパに書いてくれ！」と。それはそれは勇気のいることだった、女の子にコクる時よりも緊張した。
　僕の拙い文章にも関わらずイルカさんは「いいですよ」と快く引き受けてくれた。そして、イルカさんは親切にいくつもの企画案（この中にＫＯＷ０７１の原案が含まれていた）を出してくれた。僕は感激と興奮で、もう、あれだ、ずっとフワフワしていた。と、そんなこんなでイルカさんとのやり取りは続き、晴れて月オパの１月号にイルカさんと僕の共同企画「お前、悩んでんだろ？」の第一回が掲載された。モニター読者（友人）からの評判も上々であった。そして「おまなや」の成功に味をしめた僕は、第二回もイルカさんに「おまなや」を書いてもらい、原稿を頂戴した。
　とそんな折、２月の終わり、イルカさんから「次の企画あれこれ」という題のメールが送られてきた。ＫＯＷ０７１誕生物語はイルカさんのこのメールから始まった。では、ＫＯＷ０７１第０回（プロローグ）の本編とも言えるメールの応酬（半分は割愛）をお楽しみください。

・２月２１日
　差出人　弦楽器イルカ　宛先　オパーリン
　件名　「次の企画あれこれ」
　編集作業お疲れ様です。
　次のおまなやは松本人志とかどうでしょうか？ 世代的にピンと来ないなら変えます。ダウンタウンで笑った世代として色々云いたい感じです。
　あと、例のカヴァー小説の件ですが、もしよければパブーで交流ある方々にダメ元で参加メッセージ送ろうかなと思います。気分転換くらいの企画になればいいと考えてます。

・２月２４日
　差出人　オパーリン　宛先　弦楽器イルカ
こんばんは。昨日、月オパ２月号が完成しました。
>おまなや、第三回について
　松本人志、いいですね。僕も著作を何作か読んだ事ありますし、色々書きたいことあります。ぜひ、それでいきましょう。
>カヴァー小説について
　提案ありがとうございます。是非よろしくお願いいたします。イルカさんにばかり動いていただいて申し訳ない思いがありますが。あと、企画の内容について思うのは、題材にする小説を自由にする場合、それがマイナーすぎると誰にも伝わらないという事が危惧されますよね。まあ、それはそれでありかも知れませんが「細かすぎて誰にも伝わらないモノマネ」的な意味で面白くなれば。そこら辺についてイルカさんのご意見伺えればと思います。

・３月１２日
　差出人　弦楽器イルカ　宛先　オパーリン

件名　「メッセージ送りました」
こんばんは。３月１１日はいかが過ごされたでしょうか？さきほど、カヴァー小説のお誘いメッセージを、パブーで交流のある数名の方へ送らせて頂きました。また寒くなるようなので、体調管理にはくれぐれもお気をつけください。

・３月１４日
差出人　オパーリン　宛先　弦楽器イルカ
こんばんは。
３月１１日は、起きたら夕方でした。テレビをつければタレントやコメンテーターが鎮魂、追悼という商売にいそしんでおり、それを見るのが嫌でテレビを消し、だけれども、そんな自分は何だ？とまた嫌気が差し。
日を跨いで、野坂昭如の『てろてろ』というテロリストの小説を読み、「震災や原発は人の命を奪う、地球によるテロみたいだな。人間はテロリストには仕返しができるけれども、地球には仕返しができない」などと、考えました。
鎮魂、追悼、以外の言葉を発しようものなら途端に「不謹慎」とレッテルを貼られてしまうようなこの雰囲気に、言いようのない、もどかしさを感じます。
文章なんか書いて、何になるんだろう？俺が書いても誰も救われやしない、誰も書いてくれなんて言ってないしなあ、とそんな気分になりましたね。
それでも、映像や写真でしか見ることはできないけれど、被災者の様子や、彼らの発する言葉、涙、そういうものを見るにつけ、たまらない気分になることは事実ですね。
イルカさんはどのようにお過ごしでしたでしょうか？
>おまなや
執筆よろしくお願いいたします。いつも、最初の読者（正確にはイルカさんの次なので二番目ですね）としての特権を感じつつ、読むのを楽しみにしています。前回、マツコの回の感想を書き忘れてしまっていましたが、マツコに企画を提案する下り（特に、ビックダディとホコタテ）で爆笑しました。松本人志もどんな感じになるのか、楽しみにしています。

・３月１５日
差出人　弦楽器イルカ　宛先　オパーリン
件名　「おまなや下書きその他」
三月十一日はこちらもゆっくりしてました。たぶん、露骨な隠ぺいや風化を目的とした「追悼」にイラつくんだと思います。戸田さんにも書いたのですが、他人の痛さを実感することはできないので、自分が痛いと伝えること、そして他人の痛みを見聞きすることが大切じゃないかと思います。だから、何かを亡くした人の痛みを聞くことこそが追悼だと思いますし、自分の痛さを伝えることが、物語る意味の一つだと思います。
カヴァー小説については、私の構想で問題なければ、Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅさんが選ぶ人、書く人は戸田さん、オパーリンさん、私というところかなと思います。贅沢を言えばあと一人書き手さんがほしいかなと思いますが、月オパ連載の方など、他に賛同者いらっしゃるでしょうか？

企画の内容はメールで一斉送信し詰めていく形式にしようと思います。言い出しっぺの私がまず企画について皆さんに送信します。

・３月１８日
　差出人　弦楽器イルカ　宛先　Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅ、戸田環紀、オパーリン
　件名　「企画の叩き台送信いたします」
　お世話になっております。弦楽器イルカです。早速ですが、ご賛同頂いた皆さんに、企画の叩き台を提案致します。
　以下、☆の付いた部分が特に要相談箇所です。どんどん叩いて磨かれるよう、全員に返信していただければと存じます。
☆企画名『カヴァー小説企画　終わりをつけてやる。』
☆大賞名「（未定）」
☆第一回課題候補作「内緒」
☆発表形式
　著作権を考慮して、オパーリンさんが印刷されている「月オパ」にのみ掲載。もしかしたら他の記事とレイアウトの形式が揃わないかもしれないので、その場合は「別冊付録」みたいな形式もどうかと個人的に思いました。いかがですか？
また、無料ならばいっそネットの海に放流したい衝動に駆られますが、パブー版には企画の内容と課題作品名だけを掲載して、「読みたい人はぜひメッセージください！」といった感じはどうかと、オパーリンさんとご相談しております。（仮に読みたい人がいればの話ですが）
■その他
　楽しく、タブーを極力排して、書きたいことを書ける企画にしたいです。ご意見等、よろしくお願いいたします。

・３月１８日
　差出人　オパーリン　宛先　全員
　みなさんこんばんは。戸田さん、Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅさん、はじめまして。返事が遅れてしまいすいません。
＞☆企画名　『カヴァー小説企画　終わりをつけてやる。』
　いいとおもいます。僕からもひとつ案を出すなら、『このままじゃ終われない。』とかはどうでしょうか？ ご検討ください。
＞☆発表形式
　これに関して、少し提案させていただきます。現在、イルカさんと一緒に「お前、悩んでんだろ？」という芸能人を叱る企画をやっているのですが、冒頭にイニシャルトークみたいな感じ（Ｍツコ・Ｄラックス）で注記しておいて、後は普通に書いちゃうみたいな感じでやっています。なので、今回も冒頭に「『Ｎ○○』Ｍ○Ｈ○」みたいな感じで、あと「あらすじ」をのせちゃって、後は皆さん好き勝手に書いていただく、というふうにしてみてはどうかな、と思い

ます。
　あと、そういう風にすれば、ネットの海に流しても平気かなと思うので、皆様差し支えなければパブー版の「月オパ」に掲載という形にしてしまえるのかな、と思います。イルカさん、色々配慮いただいたのに申し訳ありません。せっかく書いていただくのにネットに流れないのもどうかな、と思いまして。あと、もし万が一抗議が来ましたら、僕が対応します。いかがでしょうか？ ということで、みなさま、作品ができましたらkuukiyomimasenn0409@gmail.comまで送ってください。では、よろしくお願いいたします。

・３月１８日
　差出人　弦楽器イルカ　宛先　全員
　件名　「楽しくなってきました」
　『カヴァー文学企画　このままじゃ終われない。』私は最高だと思います。上から目線の偉そうなおせっかい感と、湧き出る自己顕示意欲を抑えきれないわがままさが出てると思います。一票投じます。
・賞の名前
　「カヴァー大賞」「オチついたで賞」「コノオワ文学賞」←これ気に入ってます。もともとドュマゴ文学賞の一人選考委員を意識してたので。いかがでしょうか？
　あと、ネットでの公開を検討頂いて、畏れ多さもありますが、ちょっと嬉しいです。無料だしまず大丈夫と思いますが、ヤバイときは首謀者は私ということで結構です。
　　さて、実は私もまだ企画に着手してないので、そろそろ取りかかろうかな、と楽しくなってきました。できたらオパーリンさんに投稿致します。

・３月１８日
　差出人　戸田環紀　宛先　全員
　この度はお世話になります。戸田環紀です。
> *☆企画名*
　『このままじゃ終われない』でＯＫです。
> *☆発表形式*
　紙版、インターネット版とも異論はありません。あの問題にはならないと思いますが問題になった時は如何なる理由であれ著者は自分の作品に責任を持つものだと思っています。あ、正論言っちゃった・・・。大好き・・・正論。それでもってよんどころない事情によって正論を突き崩される瞬間というのが文学の中の個人的な萌えどころです。余談です。すみません。

・３月１８日
　差出人　Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅ　宛先　全員
　件名　「ご挨拶」
　オパーリンさん、はじめまして。戸田環紀さん、お久しぶりで～す。弦楽器イルカさん、お世話になります。

ひとつ質問、というか確認なのですが、「カヴァー」の物理的なスタイルは、完全に自由な状態ですか？ 箇条書き、小説形式、企画書ふう…。放っておくと、バラバラになってしまうわけですが。まあ、最初から、あまり拘束しないでアナーキーな状態にしておいた方が、方向性が自然発生的に決まってくるかも知れませんが。

お題の「名作」をネタにした創作料理ということで、とんでもない形式で書いてみるのも面白いかも知れない。現代詩ふう、俳句ふう、五七五、ラップの歌詞ふう、ファンを装った作者へのストーカー系抗議文ふう……とか。絵文字は、ないか（笑）

候補作品は、実際にやるかやらないかは別として、思いついたときに挙げておいた方がいいですね。ではとりあえず、ランダムに列挙――。今回は日本の作家なので、外国の作家の短編。やはり、話がシンプルで、ポピュラーな作品が扱いやすそうですね。

・フランツ・カフカ『変身』、『断食芸人』
・魯迅『阿Ｑ正伝』これはちと、渋すぎですかね…。
・ゴーゴリ『外套』さらに地味か。

では、日本人ですが、

・梶井基次郎『檸檬』。これは三分で再読できるし、どーとでも、できそうです。

中編どころでは両村上のバランスをとって、ということで（あまり意味はないが）、

・村上龍『限りなく透明に近いブルー』。早朝の青空が見えず、雨だったらどうなんだ、いい年してまだ福生にいるのか……とか。
・ドストエフスキー『罪と罰』長編ですが、ラスコーリニコフが、もし捕まらまらなかったら……気になります。
・三島由紀夫『金閣寺』　もし、燃やさなかったら……気になります。
・太宰治『人間失格』廃人にならなかったら、急にポジティブになったら……

だんだん発想がワンパターンになってきたので、この辺で今日はやめときます。

書いていて、ふと思いましたが、要するにパラレル・ワールド遊びみたいなものですね、これは。なるほど、２０１２年には似つかわしい芸事かも知れません。世の終わりに蹴鞠をしているような、優雅にして、過激な遊びを――。

・３月１９日

差出人　弦楽器イルカ　宛先　全員

件名　「形式に関しまして」

「コノオワ文学賞（仮）」関係者のみなさん（省略してすみません）

こんにちは。Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅさんのご質問ですが、まさに、ごった煮感覚が私の理想と考えています。マンガ形式でもいいと思いますし（以前、パブーのマンガコンテストの時には『檸檬』のカヴァーを考えてました）。五七五七七でパラレルワールドを表現するのも、素敵ですよね。

なお、手前味噌で大変恐縮ですが、この企画の元ネタでもある、私がパブーに上梓（？）している、『さして重要でない秘密』に、某小説のカヴァー例をいくつか載せてます。あくまで稚拙

な例ですが、ご参考になれば。
　既に第二回の話をして頂いて嬉しいです。Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅさんは今回選ぶ方ですので、ご自分も書きたくなってこられました？ 楽しみです。

・４月４日
　差出人　弦楽器イルカ　宛先　全員
　件名　「企画の確認等です」
　皆さん、その後お変わりありませんでしょうか？ 私の方はだいぶ書き換え出来てきたので、そろそろオパーリンさんに送ろうかと考えております。
　さて、再度、ここまでの企画の確認と、ご提案です。直すべきところは、じゃんじゃん仰ってください。
■企画名
『このままじゃ終われない。　第一回　コノオワ文学賞』
■ご提案　次回の書き手・選考委員に関して
　私が思いついただけですが、選考委員を、どなたか新しい人にしてもらって、書き手を増やしていく方向はどうでしょうか？　書くのは難しくても、選ぶ方なら、賛同されるかも、と思いました。

・４月５日
　差出人　戸田環紀　宛先　全員
　や、弦楽器イルカさんすごいですね。私は例によって例の如くまだ手をつけていません。です。自分締め切りを今月の２０日として動き出す予定でいます。予定通りにいけばいいなあ・・・。
　今週末はイースターなので明日金曜日はお休みです。うっ、久しぶりの連休・・・。小説書こ。それではまた！

・４月６日
　差出人　弦楽器イルカ　宛先　全員
　件名　「締め切りの件」
　こんばんは。イースターってアレですよね。あの、卵をなんかいい感じにするアレですよね。たぶん捧げる的な、ポーチドエッグ？ いや、そこまでは言いすぎにしても、こう、卵を丸く仕上げるみたいな、うまい具合にするアレですよね。
例のハロウィンがホラ、カボチャとお菓子を中心とした、祭り的なそういうのですから、イースターはやっぱ、卵を持った人々が、卵を中心にまとまった活動を展開する、その、祭り的な？ すみません、イースターってなんですか？ というか、まぁ知らなくてもいっか、くらいの興味しかありませんが。とりあえず、知ったかぶりしてすみません。
　ところで、私は全然すごくないです。ネタばれしないように内容は伏せますが、読んだら全然すごくないことが分かるくらいにしか書いてません。気負わない感じで、ある意味、負担になら

ない程度で書きました。
　実は、新しく書いている物語を、既に３月の月オパに連載致しましたので、個人的には、そちらに重心をシフトしていることもあり、この企画はある意味、ちょっと息抜きでやらせてもらってます。もちろん、手抜きでは全くありません。真剣な、気晴らしです。まぁ素人なので、書くこと全部が趣味で息抜きと言えばその通りですが。
　第一回目の選考委員はＧｒａｓｓｈｏｕｓｅさんの超正統派文藝批評を期待します。ハードルあげぽよですみません。
あと、あげぽよってよく知りもせずに、適当に使ってすみません。ダラダラ長文失礼しました。

・４月６日
　差出人　オパーリン　宛先　全員
　おはようございます。オパーリンです。弦楽器イルカさん、企画を前に推し進めていただき、ありがとうございます。
　企画内容に関しては、その内容で問題無いと思います。選考をしていただく方を誘っていく、というところも、その方がとっつきやすく、いいのではないかと思います。
　　僕自身、まだ書き始めていませんが、今月中には書けると思います。

・４月６日
　差出人　Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅ　宛先　全員
　弦楽器イルカさん、うーむ、これは暗に「超正統派文藝批評」のなんちゃってパロディを要求してますな。 ……難しい。三作の顔ぶれをみてなんとなくノリが決まると思います。
　ところで、「終わり」の定義なのですが、原作のどこら辺から、「終わり」とするのか。単純にオチの部分とするのか、
より広くとって、起承転結の「結」部分とするのか、自由解釈＆自己申告制とするのか、それぞれの小説観・物語観で分かれるところだと思います。
　ある意味では、ほとんど全面リライト、パロディ（筋や箇条書きでもＯＫ）みたいなものがあっても面白いと思うのですが、どうでしょう。ただし、そうなると途方もないことになってしまうので、一応は、基本的な目安として、「ラスト」の書き換えとしておく、と。
　まあ、すでに書き終わった人がいるのに……いまさら、なんですけどね。

・４月６日
　差出人　弦楽器イルカ　宛先　全員
　件名　「終わりの件」
コノオワ関係の皆さん（私は今後これでいくことにします）
　こんばんは。終わりに関しては、全て自由というのが、私の考えです。「桃太郎」でいうなら、桃太郎が桃子だったら、鬼を退治しなかったら、鬼退治したその後、などなど、題名こそ「このままじゃ終われない」ですが、カヴァーがメインで、自分なりの桃太郎を完結させればよいと

いう考えです。
頭から、また途中からのあらすじ形式が一番書きやすいのではと思いますが、それ以外にも、やりたいようにして頂くのが良いと思います。以上が私の考えですが。どうでしょうか。

・４月７日
　差出人　戸田環紀　宛先　全員
　弦楽器イルカさん、　そうです。イースターっていうのはたまごがたのアレが世の中にアレして世の中をアレしてしまうアレなものなんですよ。そこにうさぎとかはととかが入ってくるんですがこれにカメが入れば非常に日本的な古臭さが醸し出されるのにって思うのは日本昔話で育った人間の思考の洗脳され具合っていうかー。まあ、そのようなものです。たぶん。
　本題の終わりについてですが、私は終わりを続ける予定です。桃太郎でいうなら鬼退治その後です。
　ええ、色々な書き方があっていいと私も思います。個人的に書けるかどうかは別として他の方がどんな手法や思考を持っているのか知ることができるのは面白いと思います。
　ところで前回今週末はイースターと書きましたが、４月８日は仏陀の誕生日だったりします。お寺には行きませんが。いや、寺がないのではなくあるにはあるんですけど。仏陀の誕生日に何をするんだというと、アレをアレしてアレするんですよー。

・４月７日
　差出人　弦楽器イルカ　宛先　全員
　件名　「駄文です」
　こんばんは。もう僕の中でのイースターは完全に、象ガメの背中にウサギとハトの丸焼きとポーチドエッグをのせて、
仏陀のコスプレした人と一緒に食べるお祭りになりました。
ありがとうございました。
　あと、Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅさんの選評、ナチュラルに書かれたら、それでもう超正統派の文藝批評になると確信してます。私が逆立ちしてもポケットからは絶対に出てこない、
様々な文学者と文学論が、さながら卓越した奇術の様に底なしで宙を舞うことでしょう、きっと。楽しみです。（書きすぎてたらすみません。反省します）

・４月８日
　差出人　Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅ　宛先　全員
　件名　「駄文もこのままでは終われない」
ＫＯＷ関係者各位
　あれっ。もう書き換え、始まってるんですか、イースターねたで。
　戸田環紀さん、「ブラジルの仏陀」というのは、凄いですね。ぶらじるの、ぶっだ！ おお、なんか存在感がある…。金色の顔に、熱帯雨林的にびっしりと汗かいてそ～。熱帯夜の涅槃。
　桃太郎は、鬼退治したあと、どう余生を過ごすのか。なるほど。そ～こを突くか。次には、何

を退治にしにいくんだろう、あのヒト。
　きっと、退治するモノがなくなって、本来の素直さが失われ、だんだんやさぐれて、生活が荒れてくる。それでも桃太郎としては正義を振りかざし続けないと、アイデンティティと求心力がなくなるから、村人の中に「悪いテロリストが潜んでいる」というプロパガンダを流して、普通の人間を、つぎつぎと「敵」に祭り上げるはず。 一方で、ソフトなキャラを維持するために、メガネ会社のＣＭなどにも出演する。
　猿やキジも、もはや昔の勇士ではなく、名声と金と酒に溺れ、村娘を追いかけ回すだけの鼻つまみモノと化してしまった。
　そして、中央広場の祭壇には、「巨大な桃」が飾られ、崇拝の対象となっているのであった。こうして村には、どんどん自由が失われ、スパイや密告が増え、村から村へと、中央集権的な桃太郎軍事帝国が築き上げられ、ファシズム化してゆくのであった。
　次の英雄、リンゴ太郎が出現して、民衆を真に開放し、新たな時代を築く日までは…。
　弦楽器イルカさん、おだてて内輪であおがれると、ハラハラと新聞紙のように舞うところは確かです。そしてストンと落ちる。しかし「卓越した奇術」というのは、某純文学ゲームブックの弦楽器イルカさんの方がふさわしいな。

・４月８日
　差出人　戸田環紀　宛先　全員
　件名　「ＫＯＷ」
　すみません、一番の突っ込みどころはＫＯＷでした。格闘技の無差別級を想像してしまいました。
　今日は仏陀の…、しまった！　仏壇の水を換える前に自分の朝食を終わらせた！
　えー、更にＫＯＷを書き換える前に、昨日勢いで短編を一本書いてしまったのですが、これは別にＫＯＷからの逃避ではないのでご了承下さい。

・４月８日
　差出人　弦楽器イルカ　宛先　全員
　件名　「蛇足です」
　こんばんは。めくるめくスピンオフの感じに目眩です。Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅさん、既に一つ桃太郎でコノオワが出来ましたね。次回、もし桃太郎が課題作だったらこれを越えなければいけないんですね。高い壁です。いっそコノオワの模範例文として紹介してもいい気がします。
　あと皆さん創作意欲が凄いですね。ちょっと時間かかってますが、パブーで拝読致します。
　奇術という表現は幻想的な尊敬の意図だったのですが、失礼だったらすみません。私のはせいぜい東京コミックショウの蛇使いコントレベルです。レッドスネークカモーンです。
　でも、コノオワネタで盛り上がりがあって、実は嬉しいです。月オパの三月号も事前に読ませて頂きましたが、かなり充実してました。これからが楽しみです。

・４月９日
　差出人　オパーリン
　ＫＯＷ関係者各位
　お疲れ様です。知らぬ間に面白い事になってますね。さながらリレー書き換え。実はリレー小説については、弦楽器イルカさんが当初から企画案を出してくれていたんですよね。
　「さて、この一連のやり取りをどうにかして記事にできないだろうか、ＫＯＷ第０話とか、外伝とかにして」
　と助平心を出している僕であります。えへへ。
　勝手ながらＧｒａｓｓｈｏｕｓｅさんの傑作を引き継がせて頂きます。悪しからず。

　仮想敵を捏造して村人の危機意識を煽り村管理の徹底強化を行っていた桃太郎、ある日「森達也」の本を読んで激昂しました。図星だったからです。
　桃太郎は森達也の著作を禁書指定し、村の貸本屋に置いてあった在庫を有無を言わせず焼き払いました。しかし、それでも桃太郎の怒りは収まりません。「いつかとって変わられる」という不安が消えることはなく、それが怒りを焚きつけるのです。そう、桃太郎自身もいつか現れるであろうリンゴ太郎という仮想敵に脅かされていたのです。
　眠れない夜が続きました。不安を紛らわす為に祈祷師を呼びつけ「どうしたらいい？」と訪ねました。祈祷師は「リンゴ太郎の出現は定めです。運命を変える事は出来ません。近い将来、貴方を打ち倒すことでしょう。」と言って、冷たく突き放しました。
　桃太郎は益々不安になって、ムシャクシャして、腹いせに罪のない村人を拷問にかけてぶち殺しまくりました。拷問にかけられた村人の泣き叫ぶ声が聞こえる時だけ、ほんの束の間、リンゴ太郎の事を忘れる事ができるのでした。
　しかし、そんな娯楽も所詮は麻薬と一緒で、繰り返すうちに耐性ができて効力を失います。そして結局はその前よりも一層ひどい状況に陥るのでした。
　桃太郎の精神は崩壊寸前まで追い詰められていました。村も若者が惨殺された結果、凄惨な状態になっていました。年貢も激減です。
　いよいよドン詰まった桃太郎は再び祈祷師を呼びつけ、そして頼みました。
「金はいくらでも出す。何でもする。だから、頼むから助けてくれ。な、なぁ。」
祈祷師は暫し黙考した後
「それでは、鹿の角をを頭に装着しなさい。そして、全身を赤く塗りなさい。そうすれば、皆が幸せになるでしょう。」
そういう残して立ち去りました。
　桃太郎は言われた通り、鹿の角を頭に括り付け、全身を真っ赤に塗りました。
　塗り終えた瞬間、王室の扉が蹴破られました。眩いばかりに差し込む光によって、一つの人影と複数の「物の怪」達の影がありました。
　そして人影の主が勇ましく話し出しました。
「やあやあやあ、我こそはリンゴ大好きリンゴ太郎なり。貴様の所業、もはや鬼畜のごとし。よって成敗いたす！」

と、こんな感じでいかがでしょう？ 失礼いたしました。

・４月１０日
差出人　弦楽器イルカ 宛先　全員
こんばんは。ＫＯＷ文学賞でいきましょうか？
(奇しくも、私がＰＮとして拝借している二人組の頭文字が共にＫＯで、Ｗノックアウトとかふざけてた時期もあったので、これはこれで良さそうです)皆さんで作り上げる感じがいいですね。
リレー小説の話、すっかり忘れてました。したような気もします。
リンゴ太郎の件ですが、なるほど、そうやって延々ループしていく物語な訳ですね。桃太郎がリンゴ太郎に、そしてリンゴ太郎もイチゴ太郎に、更にイチゴ太郎もサクランボ太郎に倒された結果、日本では四季折々の果物が食べられるようになったんだよ、なっちゃん。じゃ、明日は、どうして海がしょっぱくなったかのお話をしようね。的な。
個人的には、「年貢も激減です」のところと、「リンゴ大好き」のところがすごく気に入りました。
メールの文章を公開することについて、実はそういう何らかの企画があってもいいだろうな、と思っていました。これを公開するなら私はそれでもいいですよ。

・４月２６日
差出人　戸田環紀　宛先　全員
早速ですが先ほどオパーリンさんにＫＯＷの原稿を送信しました。書き出した時は書き換えって結構難しい？　と思ったのですが、最終的には楽しく書けてしまいました。小説書くのって本当におもしろいですね。
ところで以前お話のあったメールのやり取りの公開の件ですが、私はＫＯＷ関係以外の部分では大したことは書いていないので好きに使って頂いて構いません。ただ、やはり事前に一度見せて頂けるとありがたいです。
本の仕上がりが今から楽しみです。弦楽器イルカさんとオパーリンさんがどんなのを書いたのかすごく読みたいです。

・４月２７日
差出人　弦楽器イルカ　宛先　全員
件名　「遅くなりましたが、これからのご提案など」
こんばんは。まず、大変奇遇ですが、私に来た連絡をまとめると、戸田環紀さんとほぼ同日にオパーリンさん、そして私も第一回ＫＯＷ課題作が出来上がりました。これはもう、因縁を感じずにはおれませんね、マジで。
私も他の方の作品がとても楽しみですし、正直ちょっと来月まで待つのがもどかしい、というのが本音です。

さて、ＫＯＷの選考方法ですが、是非、選考委員の好みだけで決めて頂きたく存じます。優劣では決してなく、個人的な好みで書き換え、好みで賞を選ぶのが、多方面から恨みを買わず、シャレで終わらす秘訣と考えております。また、「該当作なし」は、ありかなしか、議論の余地がありそうですね。

・４月２７日
差出人　Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅ　宛先　全員
おお～、皆さん、前世で何かいっしょにやらかしていたのですか。集合意識が、シンクロしてますね。
「該当作なし」なんて、せっかくの祭りに、そんな、興醒めなことはいたしません。ただ、ひょっとしたら別枠で「〇〇賞」とか、でっちあげるかもです（笑）。
＞ＫＯＷ文学賞
うーむ。最初のネーミングは、「コノママジャ　オワレナイ」「コノオワ」ですよね。正式名称は、そのまま「コノママジャオワレナイ文学賞」で行って、イベント・ロゴを、ＫＯＷ 071略して「コノオワ」あたりでしょうか…。
それでは作品楽しみにしてます。

・４月２７日
差出人　戸田環紀　宛先　全員
皆さんおはようございます。
えー、ロゴがえらく可愛かったです。
袖触れ合うも他生の、といいますので…。一つの課題に向かって文を書いているのであれば、どんぶりめしを同じ長机で一緒に食べていたのかも知れません。ね。はは。

・４月２７日
差出人　Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅ　宛先　全員
昨日、オパーリン様より、皆様の玉稿、確かにいただきました。
さて、厳正なる審査のすえ、現在、三編が最終選考に残っております。この三編はいずれも力作揃いの気配。
当方、今週、来週としばらく雑用でアレコレしておりますので、申し訳ありませんが、しばらくお待ちを……。

・４月２８日
差出人　弦楽器イルカ　宛先　全員
件名　「このオレもこのままじゃおわれない！」
ＫＯＷ０７１（コノママジャオワレナイ）３７３（ミナサン）
何がなんだか分からなくなってきましたね。（ってか、自分でわからなくしてるのですが）
本気で思うのですが、こういった有機的な議論こそ、議会制民主主義のあるべき姿ではない

でしょうか。現代人に最も欠けているのは、タブーなき議論による方針決定ではないか、結論ありきの、お金で人間を動かすシステムを打破したい、次回の「お前悩んでんだろ　最終対談」ではそこらへんをやれたらいいと思っております。（無駄に熱い文章で失礼しました）

　さて、いろいろちょっとまとめてもいいでしょうか？

①企画名ですが、一周まわって、コノオワ文学賞でいきましょうか？ そして、ＫＯＷ０７１に関しては、ロゴマーク案を３つ作成しました。Ｔシャツを作るときはこれでいきましょう。野球キャップもこれで。ちなみにどのマークがいいでしょうか？ あと、全然違うマークでもいいです。

（１）

（２）

（３）

②『このままじゃ終われない』と『このままでは終われない』どちら？

③いろんな賞をつくって全員にあげる。これ、恒例にしましょうか？ ちなみに、「厳正なる審査のすえ」ってぐっときますね。私がはじめに考えてた感じがまさにそうです。それで「該当作なし」だったら、どんだけ格式高い賞やねんって思います。

④余談ですが、私は選評がくるまで皆さんのは読まないことにします。ドキドキしていたいので。選評と一緒に読んで、コメントを書く予定です。

・４月２８日

　差出人　戸田環紀　宛先　全員

　弦楽器イルカさんの熱いメールを見て先日読みました寺山修司の「家出のすすめ」を思い出しました。ちょっと長いですが以下抜粋します。

「きたないことを話す会。はずかしいことを話す会。いってはいけないことを話す会。など、「話すことがたのしくなる」ような小さい会が、もっと開かれてもよいのではないでしょうか。そしてパーティがおわると人たちが去ってしまうように、話題もことごとく消えてしまうような会のなかに、カタルシスを見出せるような会こそが、口承文芸や、即興詩人の育った素地なのではないでしょうか。」

　別項目にて。これは私の個人的なツボにきたところ。

「わたしは言行不一致はそれなりで、なかなかいいものではないか、と考えています。すくなくとも、言行不一致を平気で容認していけるような太い神経だけが、長い歴史をすこしずつ変革してきたと考えられるからです。（ここで寺山は踏み絵を拒んで死んでいったキリシタン信徒によっては何も変えられなかった、と言っている。）～中略。「立派なことをいうが、あいつのしていることはいったい何だ」などという非難で、本末を転倒してはならない。思想

は本来、無署名のものであることを知っておきさえすれば、理想主義者トルストイが夫婦喧嘩のすえ、汽車に轢かれて死んだ……などということはいっこうに騒ぐに足らぬことだ、ということがわかります。あいつァ人殺しだが、あいつの人道主義の説教はなかなかいいぜ、というくらい、徹底した言行不一致をたてまえにして始めねばおそらくいっさいの思想運動などは育たないでしょう。」

ありがとう寺山。

　本題に戻ります。
　次作以外はどうぞ皆さんでと言っておきながらコメントしてしまいます。これ、朝令暮改の正しい見本ですね。
>①
　ロゴは私は１か２がいいですー。弦楽器イルカさん、バンダナを忘れています。
>②『このままじゃ終われない』と『このままでは終われない』どちら？
　じゃ、の方が舌触りがよい。気が。
>③いろんな賞をつくって全員にあげる。これ、恒例にしましょうか？
　おまけみたいで楽しいですー。
>④余談ですが、私は選評がくるまで皆さんのは読まないことにします。
　私そっこー読んじゃいました。
　では皆さんよいゴールデンウィークを。

・４月２８日
　差出人　Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅ　宛先　全員
　ＫＯＷ０７１　関係者様各位
　関東は、い～い天気です。蝶々も、ひらひら、飛んでます。太陽フレアも、ときどき近所の路上に、手裏剣のように飛んできます。さて、と。
■弦楽器イルカさん
>②『このままじゃ終われない』と『このままでは終われない』どちら？
　このまま「じゃ」の　ja…の音がいいですね、哀切で。人の世の弱さや、愚かさを、「じゃ」の音に封じ込めているなんざ、なかなかの文学です。これぞコノオワ精神の凝縮、というものでありましょう。（←んなふうに、この言葉は使おうと思ってます）
コノオワ精神＝もののあはれ＋お笑い＋KAWAII＋COOL
【実用会話例】
「おい、スティーブ。日本語が上手く喋れるからって、コノオワ精神がわかったとは、言わせないぜ！」
「ヤマダサン、ぜひボクに、コノオワのココロを、オシエテ　ください」
■戸田環紀さん
　文字化け妖怪が、赤道付近でイタズラしている模様。お手数ですが、よろしかったら再送して

いただけますか。このままじゃ眠れない…。
　つーか、まだ昼ですけどね、こちらは。

・４月２８日
　差出人　Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅ　宛先　全員
　戸田環紀様、さっそく、ありがとうございました。行間が文字化けするんですか？？よく行間を読めとかいわれますが（なにか面白いことを言おうとして、思いつかない状態）…空白も、化けると、やはり、読めませんねえ。（なんだよ、そのまんまじゃん！）添付ファイルまで、お手数おかけしました。
・今後のスケジュール
　『このままじゃ終われない文学賞』
　ＫＯＷ　０７１　発表
　審査会場　東京・築地「新痴楽」にて
　目安として、一週間ばかり、お待ちください。ゴールデンウイーク内には、結果が発表できると思います。一応の予定としては、５月５日の子供の日（ちっとも、関係ないですが）、
日本時間で、午前０時メール発信をと考えております。
　ゴタゴタしてるんで、ひょっとしたら、前後一日二日ずれるかも知れません。（いいかげんです。当日、あらかじめ前もって告知します）内容は、受賞作品の決定と、総評・選評などです。

　と、かような感じで、幾多の困難、波乱を乗り越えて、ＫＯｗは誕生したのである（まだだけど）。一つの企画が生まれるまでのドキュメンタリー、いかがだっただろうか？ じゃ、ミナサン、お楽しみに！！

「ギュンギュンすんな」

執筆者　東町健太

今、この文章を書いているのは四月十日、冬の厳しい寒さもすっかり去り仕事をしているときなどは汗までかくほどにあたたかになった。まさに春である。春って季節がなんかいい感じがするのはあれですな。なんとなく気分が一新されるというか、フレッシュな雰囲気があるからなんですな。そしてそれだけでなく、春といったら桜なんです。桜。いいじゃない、綺麗じゃない、ってなことである。僕も桜並木なんか歩けば「おおっ、桜めっさ綺麗やんけコラ」と思う。綺麗なものを見ると楽しいな、嬉しいなと思ってうきうきする。うきうきすると往来をニヤニヤしながら変質者のような目つきでスキップしたくもなるし、ＴＶで消費税増税がどうこうと議論しているのを見ても「ほほ、消費税いいじゃない。綺麗じゃない。どんどんあげたらいいわ。いっそ３００％くらいにしたらいいんじゃないかしら。おほほほ。」などとオネエ言葉で微笑んでいられる。家の中で独り鏡の前で「右ひじ左ひじ交互に見て～」みたいなことをフルテンションで二時間くらいできる。僕みたいに周りから偏屈だと言われている人間でもこうなのだから桜という木の持つ人をご機嫌にする力はすさまじいものなのだと思う。

そういうことでこの時期には国民的な行事として花見というものがある。桜の花でも見ながらみんなでわやくちゃになったらんかい！という楽しい行事である。僕も花見はもちろん大好きで、毎年桜がいい感じになると花見をする。桜の木の下で酒なんか飲みつつ歎異抄の話、死後の裁きの話、喫煙と肺がんについての話など愉快な話をして爆笑するのはとても気分がいいことである。今年はまだそういう機会がないがぜひ時間を作って花見をしたいものである。

しかし、僕の友人でそんな最高な花見をキライだと言い放った人がいた。えっ？何で？おかしいじゃない桜綺麗なのに、と思ったから理由を聞いてみると彼が言うには、桜は確かに綺麗で最高なのだけれども、じゃあってんで花見をしようとするとどこもかしこも人がギュンギュンになっていて桜でいい気持ちになっても人のギュンギュンさに疲れてしまってせっかくのいい気持ちがなくなる、ということである。

友人がそう語るのを聞いて「ふっ哀れな奴よ、花見の楽しさもわからぬとはな‥。」と思って彼を哀れんだりしたかというとそうはしなかった。えっ？なんで？そいつまじかわいそうじゃん。と思われる方もいるかもしれないが実は彼の言ったことを私も内心うすうす感じていたからである。確かにこの時期の上野公園、新宿御苑、といった場所ではギュンギュンに人が集まっていて、あっここの場所桜ようけ見えてぐつよろしいやんけ、と関西弁で思ったりしてもその場所にはすでに大学生かなんかのグループが青シートを広げて騒ぎ散らしていたりするし、ようやくいい具合なスペースを確保し楽しげに絶叫していても至近距離にカタギでない系の方たちが青シートを広げているのに気づいて一同沈黙、「汚れちまった悲しみにけふも小雪の吹りつむる‥ふふ」などと蚊の鳴くような声でささやき卑屈に笑いあう、みたいなことになったりするのはよくあることだ。別に怖い人たちがいなかったにしても近くで騒いでる人たちに「ちょ、お前らも

うちょいそっち寄れや」と思うこともあったし、公園に設置されてるトイレの行列がひどいことになっていて「俺以外の人間は家帰って自分ちのトイレ使えやっ」と自分勝手極まりないことを思ったりした。ギュンギュンに人が集まる場所にいるというのは結構疲れるものだ。もし広大な敷地に膨大な桜があってそれぞれのグループが十分な面積の場所を余裕をもって確保することができればこんな悲劇は起きない。しかし日本というのは人口が多く一億を超える人民が暮らす国家でかつ土地もアメリカさんのように広大でないためこのような悲劇がおきる。悲しいことだ。残念なことだ。

まあただ言い方はわるいが所詮花見である。どうこういったところで一年で一回二回しかない行事である。それくらいのギュンギュンには我慢したっていい。実際そのギュンギュンというデメリットがあっても花見は楽しくほぼ毎年行っているのだから別にいいじゃんとも思っている。このギュンギュンもまあよく言えばにぎやかってことでいいんじゃね？くらいに好意的におもうこともできないこともないことはないような気がしないでもないんじゃないかな。

しかし静観していられないのはこのギュンギュン問題は花見のときだけではない、ということである。花見はまあいい。頑張る。しかし私は毎日ギュンギュンである。どういうことかというと千代田線のことである。

朝。毎朝私は千代田線に乗り込み仕事に行く。この千代田線がまたとてつもなくギュンギュンなのである。千代田線以外ももちろんギュンギュンなのだろうが私は他路線の事情はしらないから千代田線の話のみにする。ギュンギュンが不愉快であるということは先程から述べているしわかりきったことである。しかしギュンギュンは確かにむかつくけれどまあそれもしゃあない、ここは一つ忍耐したろうかな、と思うのが大人であり、それは人として当たり前の話である。いくらギュンギュンがむかつくといっても「だらあっ！」などと叫んで暴れてもそれは解決しないし、「全員今すぐおりろやあっ！」と要求してもそんなものが通るわけはない。だからムカつくのは我慢してまあすこしでもみんなお互いにムカつかないようにしようよって感じでやっていかなければならないわけだが、そういうことをしない人というのがまたかなりな割合でいる。駅に着いて降りるときに人をひじでガンガンにぐいぐい押しのけておりるやつ。大音量でエクザイルかなんかをヘッドホンで聴いて音もらしてクンクンしてるやつ。車両の奥のほうにわりとスペースがあるのに乗降口付近で動かないやつ。などなど。

なんでこんなことになっているかというとそれはみんな内心自分のことだけしか考えていないのであり、他人がどうあれ自分のみがよければいいと考えているからである。まあそう考えるのはいいとしてもそれを具体的に行動に移してしまっていて他人へのムカつきを発散させてしまっているからである。そうやってムカついているのを発散している人間にたいして、「ちょっと俺邪魔になってるからどかなきゃな。」などと気を遣うなんてことをするのはやはりむかつくので「俺、死んでもどかねえ」みたいなことになってしまって、またそいつの周囲がムカついて、というムカつきの連鎖が始まりこんな体たらくになってしまっている。だから奥の方のスペース的には余裕があってもなんかギュンギュン、などというわけのわからない事態が起こったり、電車内で恥ずかしげもなく怒鳴りあいを始めるおじさま方なども現れたりする。失笑。そいつらが冴えなければ冴えないほど笑える。これを解消するにはまあ一人一人の心、というかマナーの意

識しかないわけだけれどもなかなか解消されないのが現実である。
　電車内のマナーということになると携帯電話の使用はひどい。なんでも携帯電話の発する電磁波的なものが心臓にマシーンをどうにかしている人にとっては危険らしい。詳しいことは俺は一切知らんけど。だから鉄道会社各社も「すんませんけども、優先席らへんで携帯電話をつこうたりするんは正味な話、やめてつかあさいっ」などとアナウンスしたりはするが誰も彼もそんなのは、「はは、なんか言ってるぜ、おもろ」などと言ってこれをシカト、メールをうちまくる、「電車なう」などとつぶやくといった横暴を働いている。もし付近に心臓マシーンの人がいれば「ぐうっ」とか言って即死するかもしれないにもかかわらずみな楽しげに携帯をいじくりまわしハッピーを謳歌しているのだ。なんたるふざけたことだろうか。ダメじゃんか。
　そうやって多くの人々はギュンギュンな電車でむかつきながら、上野公園かなんかでギュンギュンな花見をして、よりむかつき、そしてふたたびギュンギュンな電車にのってむかつきながら帰る。このつながりはもはや「ムカつき」などというひとことで表すこともできないような深みをおびていて、なかなかに深遠なのだけど、これを解消するには一つしか手段はないと思う。それは何か。簡単なことだ。一人一人が人を思いやる気持ちをもつ。たったこれだけだ。去年よく聞いた言葉を使うなら、「絆」だ。こんな小学校で教えられたようなことを、しかもテレビやなんかで声高に叫んでいたようなこと、そしてさんざん手垢のつきまくった言葉であるのに、実践してるような方があまりおられないように僕の目にうつる奇妙奇天烈不可思議。
　口で言うなら実践しろよ。口先だけ奇麗事言って体裁整えてごまかして生きてんじゃねえよ。嘘ついてんじゃねえよ。汚くてもいいから真実だけ言えよ。な～んて思っちゃうわよ、とオネエ言葉でブツブツ言いつつ窓から見える桜をみたら、やっぱし奇麗でいい感じで、私ったらとってもとってもご機嫌なのよ、おほほほほ。

「『四月に見る夢』を読んで、思ったこと」

執筆者　オパーリン

　自分の未来がどうなるのか、自分では分からない。だから心配になったり、悪く考えてやけっぱちになってしまったりもするんだろう。

　自分の過去が、自分にとってどんな意味を持つのか、果たしてどれくらいの人が性格に認識しているだろうか。あるいは規定しきっているだろうか。未来、過去、そのどちらも、僕にとってはそう定かなことではないのかもしれない。

　自分はいつどうやって死ぬのか、僕の記憶している光景は果たして本当に自分の身に起こった出来事なのか。そうやって考えているとなんだかクラクラしてくる。でも僕はその感覚が嫌いじゃない。実のところ、中々好きだ。

　『四月に見る夢』を読んでいて、今言ったような「クラクラ」とする感覚を味わった。１＋１＝２、そういったやり方で世の中・物事を規定して屁とも思わないような人達が沢山いる。でも僕は何かを考え始めると、よく分からなくて、クラクラしてしまう。だから、あの地震が何だったのか、と考えてみるのだけれども、よく分からないのだ。よく分からないからこそ、地震はまだ僕の中に止まって、また折に触れて僕をクラクラと、モヤモヤとさせるんだろうと思う。

　弦楽器イルカさんが今見ている光景と、僕が今見ている光景は、きっと違うものだろう。だから、同じ地震でも、イルカさんの地震と僕の地震は同じものではない。同じになることも無い。それは人間の宿命だろうと思う。

　ただしかし、イルカさんが書いた小説を読んでいる時、その瞬間僕は、ほんの一時イルカさんの「眼」を借りて、イルカさんが見ている光景を、イルカさんの世界を見ているんだと思う。だからクラクラするのだ、乗り物酔いしたみたいに。でも、僕はこの感覚が好きだ。

「『兵隊やくざ』は同性愛の美学を僕に語りかける」

執筆者　オパーリン

『兵隊やくざ』は言わずと知れた、勝新太郎の代表作の一つである。誰に対してどの程度言わずと知れているのか、そう聞かれるとなんとも言いがたいんだがね。僕は最近、そういうこと、「一般的に」みたいなのが果たしてどういうことなのか、どんどんと分からなくなってきている、まあ、それはいいや。

知らない人のためにほんのチコッとだけあらすじを書こうか。勝新太郎演じる大宮喜三郎（二等兵）と田村高廣演じる有田上等兵のコンビが軍隊でムチャをするという映画だ。大宮は破天荒な元ヤクザ。その上官の有田は名門生まれのインテリで、日本軍の戦争が馬鹿らしい（勝てるわけないじゃん）と思って不貞腐れ気味である。いわゆるデカダンというやつだろうか。

で、だね。大宮喜三郎は殆ど原始人だから、ルールとかそういうのが一切分かんない。だから上官たちに目をつけられるんだけど、元ヤクザだからその上官をフルボッコにしちゃう。で、さらに恨みを買って、上官たちは仲間を集めて大宮をリンチする。そのピンチを有田上等兵が知恵を使って助ける。でも、そんなのは長く続くはずもなく、最後は脱走。これが第一シリーズ。第二シリーズ以降は、冒頭で脱走が失敗し、軍に逆戻り。その後は第一回と同じ流れである。以降、毎回毎回同じパターンが繰り返される。

いやー、はまったね。このコンビの男の友情がメッチャいい。これほど繰り返しが心地よい映画もそう無いんじゃないかと思う。人生やけっぱちの大宮は自分に偏見を持たずに好意を寄せてくれる有田を心から慕う。有田は有田で、世渡りだけは適当にやって早く除隊することだけを考えて「逃げ」に走っていた自分には無い、大宮のプリミティヴな、無垢とも言える様なそんなとことに惹かれていく。

そして幾多の困難を乗り越え、二人の絆はどんどんと深まり、もはや一心同体というレベルに達する（絆っていうのはこういうときに使う言葉なんだよ！！）。大宮は三度の飯より好きな「女」を捨ててでも有田と一緒にいることを選ぶ。有田は自分の身を危険に晒してでも大宮を守ろうとする（喧嘩弱いくせに守ろうとするから、いつも敵にボコされる。で、それを見た大宮がいつもマジギレして敵陣に特攻する）。

「自分は、有田上等兵殿といつも一緒であります！」と大宮が言い、有田は「そうか」とだけ言って、心底嬉しそうに大宮と見つめ合う。見つめ合う。見詰め合う。

で、思ったんだよ、俺。この二人は間違いなく恋しているな、っていうか愛だな、もうこれは、って。そうなんだよ、こいつらはもはや友情とかでは語りつくせない域に達してしまっているんだよ。

そんでだね、一回そう思っちゃうと、もうそういうな視点でしか見れなくなるんだな、これが

。シリーズものだからさ、ツー、スリー、と見るたびに二人の愛がますます深まっていって、何かもう、胸がキュンキュンしちゃうんだよ。で、「あれ、これ見てギュンギュンしてる俺って、何なん？」と思ってハッとするわけさ。「おいおい、俺は女の子が好きなんだぞ、どうしたことかしらん？」って思うわけよ。

でもさ、大宮が仲良くなった娼婦と結婚しちゃって、有田は「おめでとう」って口では言ってるのに、初夜の時、物凄く寂しそうに一人で酒飲んでるシーンになると、何か俺まで切なくなっちゃってさ。で、大宮が寝床を抜け出して、嫁さんほったらかして有田の部屋に行くわけよ。そして「自分が嫁と寝ちゃったら、有田上等兵は寂しいでしょう？」って言うのさ。それ聞いて有田はこれ以上無いくらいにホロリとした感じになって、「ばかやろう」って嬉しそうに言うの。で、二人で一緒に寝るの。俺もうこれ見て泣いたね。「これが、これが愛じゃん！」って思ったよ。

なんかさ、俺はもう自信無くなってきたよ、本当に女の子が好きなのかどうか。あのクオリティーは女との愛では出せないとすら思うよ。まあ、それは置いといて、この映画でのキモは、実は勝新太郎よりも、田村高廣なんじゃないかって思うんだ。いや、もちろん勝新太郎ありきなのは当然なんだけどもさ。田村高廣の演技が至高なんだよ。しかも田村正和のお兄さんっていうトリビア。

何だか良く分かんなくなってきたから、っていうか俺のカミングアウトみたいになってきたからそろそろ終わりにするけどさ、この映画を見たら男なら誰しも少なからず自分の異性愛への自信が揺らぐと思うよ、程度の差こそあれ、うん。

カミングついでにもういっちょカミングしとくとさ、実は俺はこの映画を部屋で友人のＳ君と一緒に見たんだよね。で、Ｓ君も見終わった後、「めっちゃ良かったわ」って言っててさ、「あれ、もしかして俺、Ｓのこと、好きかも」ってちょっとドキドキしたんだ、うん。ワリトマジデ。

あとは、この映画意外だと、最近「ピカルの定理」っていう番組で「ビバリとルイ」っていうのやってるじゃん。あれも面白いよね。と、こんなことばっか書いてると俺の数少ない友達がいなくなってしまいそうなんで、本当に終わりにします。以上、カミングでした。べ、別に、女の子が嫌いなわけじゃないからね！好きだよ、女の子、まあまあ…。別に…。

「終わりを持たない物語のあとがきにかえて。」

執筆者　弦楽器イルカ

弦楽器イルカです。
この度寄稿した物語を書くにあたって、何かを書くのはこれで最後にしようと思っていました。
十代の末に書いた長い物語はこのように骨格だけを抜かれて、二〇一二年の肉をまといネットの血脈を流れてあなたの元へ辿り着きました。
本来、この後に続くはずの長い物語は現実に追いつかれてしまいそうで、とりあえず終わりを付けずに未完の完という形で（そういういうものがもしあれば、ですが）あの時代に作った歌の歌詞を添えて、今を生きる我々と同時進行の物語としてありのまま提示いたします。
今後については、やめてしまう前にこの月オパ関連で少し書かせていただいて、あとは少し考えます。
それでは。ありがとうございました。

『この部屋を出る前に』

「わかってる　わかってはいる
僕も君も　悪くない」
そういった分別だけじゃ
僕はごまかせない

間違いを繰り返しても
決して良くはならなくて
新しい流れの中に
僕の目は　向かう

道端で立ち止まり　ふと　思う
「どこ行こう？」
立ち尽くし　笑い出し
これが生きることと　歯ぎしり

今でも夢では　あの頃の君が
僕の目を見て　話しているよ
逃げられなかった君の夢
今では　少し待ちわびる　僕を支えてる

何もかも　諦めたフリ
目が君を　探してるから
僕はただ　今日　雪の日に
この部屋を出よう

「どこかにはあるはずで
でもどこかわからずに
大丈夫　それだけで
僕は生きていける」
でまかせ

それでも僕には　見るべき夢があり
覚めるべき夢は　跡形もなくて
荷造り始めた　僕の心住まいに
とりあえず僕は　ひとり

いつかは　いつかは　今の僕のことを
笑う日が来ると　知っているから
悔しい　嬉しい　羨ましい思いで
いつかの僕まで　この足で
この歌で

オパーリン一ヶ月（日記より）

　オパーリン国王の動静。これを読めば王国全体で何が起こったのか、分かるでしょう。

２０１２年４月
・１日
　朝日新聞社筆記試験。就活喫煙所仲間と無事に落ち合い、試験までだべる。休み時間、速攻で喫煙所に向かい、また彼とだべっていると、隣にいた年上と思しき女性から声をかけられる。仲良くなり、試験後も喫煙所でだべる。その女性に「君はなんか受かりそうな気がするよ」と言われる。筆記試験、通過せず。
・４日
　新潮社一時面接。会場に行くと『波』という小冊子をくれた。それを読みながら面接の順番を待つ。面接、３０代半ばくらいの社員二人（男と女）が担当。「何で生物学を専攻しているのに、出版社を？」と聞かれる。僕は、ロシアの生物学者アレクサンドル・オパーリンに憧れて「生命を創造したい」と思い生物学類に入学したこと、すぐに挫折したこと、その後、ならばと文章を創造（小説の執筆）してきたことを力説した。社員「…、そうですか。では、次の質問は…」と全く関心を示さず。終始静かな面接だった。もちろんここで脱落。
・８日
　学研筆記試験。会場には３００人ほどの受験者が。この時点でもうヤル気を無くす。漢字問題が難解であった。一割も回答できず、撃沈！後日、お祈りメール受理。
・１４日
　祥伝社筆記。油断していたら、この会社はファッション雑誌を発行しているらしく、２００人規模。作文は小宮山大臣をディスっておいた。死亡。後日、文面にてお祈り。
・１８日
　某実験機器商社の説明会兼一次選考。その日の内に選考通過のお知らせが来る。そこで完全に図に乗った俺であったが、この油断が後に悲劇を生むことに…。
・２７日
　某実験機器商社の一次選考だったはずの日…。そうです、面接を予約し忘れたんです。前日に気づき、大急ぎで会社に電話するも、アウト。オワタ。

読了リスト、感想文

　このコーナーでは僕がその月に読んだ本や、見た映画等の簡単な感想を書いていきます。

－本－
・田中慎弥
『切れた鎖』
　短編集。芥川賞受賞作はまだ読んでないんだけれども、これ読んで何となく感じはつかめた。登場人物が作中で段々と狂っていく、その狂い方の「いびつさ」加減がこの人の持ち味なんかな、って思った。あと、過去に囚われる感じ。

・阿佐田哲也
『愛蔵版　阿佐田哲也麻雀小説自選集』
　実家の近くに四季書房っていう古書店があって、最近勇気を出して入ってみたんだ。そしたらこの本が「でん」と僕を待ち受けていて、衝動買い。３０００円位したと思う。
　実は僕、麻雀は殆ど（ルールくらいしか）分からないんだけれども、楽しく読めた。まぁ、分かってればもっと楽しめたんだろうけれどもね。殆ど「いかに上手にイカサマするか」という感じ。あとは登場人物の人間模様とか、そういうのが面白かったな。「麻雀分からんから手を出しづらいな」とか思ってたんだけど、これを気に色川武大だけじゃなくて阿佐田哲也作品も読んでいこうと思う。

・西村賢太
『苦役列車』
　西村健太の作品は文庫になっているのは大体読んでいるんだけど、短編私小説がなんかパズルのピースみたいに徐々に繋がっていく感じがする。で、全部合わせると壮大な長編になる、みたいな。例えば、『苦役列車』は１９歳の頃の話で、後々金をたかりに行く郵便局員との出会いが書かれていて、読んでると「あ、こいつか」みたいになんか発見した気持ちになっていうれしい。併録されていた『落ちぶれて袖に涙のふりかかる』の方は作家になって芥川賞を取る以前の話。こっちも中々面白かった。今後は芥川賞受賞後の西村さんがどういう風に私小説になっていくのかが楽しみ。

『人もいない春』
　短編集。この本では、そこまで劣悪なＤＶはお目見えしなくって、彼女との関係が崩壊する前の一時の平穏的な短編とかが印象的だった。あと、私小説ではなくってカレー屋に住むネズミが人に虐殺されていく短編とかも入っていて、それも面白かった。
　読む度に思うんだけども、西村作品の「悪態」節は神業だと思うんだよね。あんな風に罵倒されたら、もはや怒れないと思う、その罵倒の完成度に感動しちゃうと思う。

・岡本太郎
『自分の中に毒を持て』
　岡本太郎、完全に神だよね。太郎先生による人生指南という体裁を装っているんだけれども、この本に書いてあることを実行したら絶対に死ぬからね。僕はこの本を読んで「安穏とした道は断固として切り捨てろ。そして歯軋りして、死の恐怖を味わい、尚且つそれを乗り越えて己の生命を、生命のエネルギーを全開にして放出しろ。その発露こそが芸術なんだ」というメッセージを受け取った。その通り、その通りなんだよ。でも、みんな出来ないんだよな、それが、その圧倒的に正しいことが。
　僕は芸術に造詣が無いから、本の途中に挿まれている太郎氏の絵は全く何のこっちゃか分からないんだけれども、文章は（以外にも？）非常に分かりやすかったな。太郎氏の母ちゃんは岡本かの子っていう作家だしな。
　太郎氏がすさまじかったので、最近は岡本かの子も読んでみようと思って本を収集しています。これまた近所の四季書房でボロボロの『生々流転』というかの子氏の本を発見し、狂喜乱舞して買っときました。でも開いてみると、ルビないし、漢字難しいし、紙はボロいし、印刷はあの古い本独特のなんていうのかな、滲んでいるというか、そういう感じだし、とかなり読みづらい感じだ。再販を望む。

・別冊宝島編集部
『となりの創価学会』
　驚くほど創価学会に好意的な本だった。でも、考えてみれば、創価学会について好意的に書いてあることに驚くこと自体が、あらかじめ刷り込まれている「イメージ」があることを物語っている。完全な中立なんて不可能なんだから、本当にちゃんと知る為には否定的なものと、好意的なもの、両方ちゃんと読んで考える必要があるもんな。そういう意味ではこの読書体験は結構有意義だったのかも知れない。内容的には、学会員の普段の暮らしとか現実社会との齟齬みたいなところが詳しく取材されていて面白かった。

・別冊宝島編集部
『公安アンダーワールド』
　公安内部の機密文書を入手して、それを元に書いた本らしい。が、いかんせん〇〇〇とか×××とかの伏せ字が多くて、ほぼ内容が分からんかった。固有名詞に限らず、動詞とかにまで伏せ字が入っていた気がする。
　でも、日本国内で国家スパイが暗躍している、っていう創造を膨らませるにはいい題材なのかもね。

・伊藤文学
『『薔薇族』編集長』
　伝説のゲイ雑誌『薔薇族』を創った伊藤文学氏による、雑誌の誕生と盛衰のお話。本の中で色

んな読者からの手紙が紹介されているんだけど、本当に十人十色って感じで、面白かった。考えてみれば当たり前なんだけどね、「日本人」っていう人がいないのと同じように「ゲイ」って人もいないんだよね。だから人括りにするなとかそういう話でもないんだけどさ。やっぱり全体について考えたりしていくことも必要だろしね。うーむ、この問題についてはまだまだ勉強していく必要があるな。

でも、この本に出てくる読者の人達が、自分がゲイだっていうことを打ち明けられないで悩み苦しんでるのを読むと、僕はこの問題の当事者ではないけれども「なんとかならんのかなぁ」と思う。ただ、当事者ではない自分がとやかく言うのも筋違いかなあ、という引け目みたいのもかんじるんだよね。「We are already living together.」なんだよね。

・松沢呉一

『ぐろぐろ』

もう完全に僕の中で「師匠」に認定したね。９０年代半ばにスカルファック（肛門とか性器とかに頭を入れるという鬼畜プレイ）についてここまで言及している人がいるとは。

この本は元になった雑誌連載の初回掲載後に「下品、不快」という抗議、苦情が来たことから方向性が確定する。松沢師匠は平身低頭し、「今後はそんな不快なことが無いように、社会から不快なものを駆逐すべく頑張る！」みたいな感じで頑張りだす。その後は「こんな不快なものを発見しました！これは書きません！」といって読者に不快なものを撒き散らす戦法が展開される。最初はエロ系の「不快」なものを紹介していたのだが、段々と方向性が変わり、ウンコ、ゲロ、痰、ウジ、ゴキブリ、寄生虫、とエスカレートしていく。

「「不快」っていったい何なんだい？誰が決めたんだい？果たして僕にとっての「不快」と君にとっての「不快」って一緒なのかい？」と松沢氏は問いかけてくる。ＰＴＡ的なものへの懐疑、「良識」というものの横暴な側面、つまりは「あたりまえ」を疑うということの重要性、本当の寛容さとは何なのかといったようなことを考えさせてくれる良書。

まあ、僕も読んでいて何度か鳥肌が立つほどの不快感を味わったが・・・。松沢師匠は「不快」の天才だ。

－映画－

・『監督失格』

平野勝之監督の復帰作。なんか庵野秀明氏がプロデューサーを努めていて「何で？」って思ったんだけど、エヴァ劇場版が煮詰まっている時に平野監督の『由美香』を見て感動して頑張れたから、お礼がしたかったからなんだってさ。

この映画はすごく私小説的なドキュメンタリーなんだよね。でも、あらすじとか書くと長くなっちゃうから、気になった人はググってくだしゃい。

で、感想というか、そういうのを書いていくね。ＡＶ女優の林由美香を題材にしたドキュメンタリー映画は平野監督の『由美香』（１９９７年）、本作『監督失格』（２０１１年）以外に、松江哲明監督の『あんにょん由美香』（２００９年）がある。林由美香さんが亡くなったのが２

００５年。だから、松江哲明監督の『あんにょん由美香』と『監督失格』は死後のドキュメンタリーということになる。
　で、僕は『あんにょん由美香』の方も見たんだけれども、作中に平野勝之監督が出演しているんだよね。で、松江監督と酒飲んでる時に、平野監督が「マジでちゃんとやれよ」的なことをかなり強い口調で松枝監督に言っているシーンがあるんだよね。
　平野監督は一旦は若手（松江）の撮影に協力したのに、敢えて自分で撮り直した。結構、因縁めいたところがあると思うんだよね。
　で、僕は『あんにょん由美香』も結構いい映画だなと思っていた（僕の大好きなバクシーシ山下監督も出演していたし）。でもね、『監督失格』を見て納得してしまった。完全に納得してしまった。平野監督はこの映画を撮らなきゃならなかったんだって。これだけ必然性を持った映画ってそうそう無いと思う。
　あと思ったことはね、ドキュメンタリー映画の残酷さというか、辛さというか、そしてそのカメラが切り、取り写し続ける映像の持っている暴力的なエネルギーというか、そういうものに打ちのめされたね。私小説作家はきっとあまねく人生の瞬間を文字にしてしまいたいとそう思っている。そして、ドキュメンタリー映画監督も、あまねく瞬間にカメラを回し続けたいと思っているんじゃないか、と思うんだ。でもさ、それは凄く過酷な欲求なんだと、そう思った。
　林由美香さんの死後、現場に駆けつけたカンパニー松尾監督がグシャグシャに泣き崩れて、何も撮れなくて、「由美香が死にました。」って言って泣き崩れる、っていうシーンがあるんだけども、そのシーンを見て、ドキュメンタリー監督であることの過酷さみたいなのを感じたのでありました。

・『イグジット・スルー・ザ・ギフトショップ』
　覆面ストリートアーティスト・バンクシーが監督した作品。
バンクシーのファンである「ティエリー」を撮ったドキュメンタリー。このティエリーの無垢なマジキチ加減が可愛い。バンクシーの勧めでティエリーはミスターブレインウォッシュ（ＭＢＷ）と名乗ってストリートアートを始めた。けども、創るのはゴミみたいな作品ばかり、しかし本人はそれに気づかずに全財産をはたいて個展を開いてしまう。
　見かねたバンクシーや仲間のストリートアーティスト達はＭＢＷを推奨するコメントを寄せる。と、個展は絶賛され、ＭＢＷは本当にストリートアーティストとして認められてしまう。
　「アート」って何なの？「いやー、ゴッホの「ヒマワリ」は素晴らしいねぇ」とか言ってる奴の果たして何割が本当に理解してんの？という事を考えさせられる映画だった。
　実際俺も、絵を見ても何も分からないしな。こないだ上野をブラついてたら、可愛いお姉ちゃんに呼び止められて、アートギャラリーに連れて行かれた。シルクを使った版画を売っているらしい。が、全く分からん、なんでイルカの絵が１００万もするんだ。でも、お姉ちゃんが可愛かったので、１０００円のポストカードを買ってしまいました。結論、アートを解せないイカ臭い男には、イルカよりも可愛いネーちゃんの方が効果的である。

・『ＳＵＰＥＲ』

友人に薦められ「『キック・アス』のパクリじゃん」とか思いつつ見たら、予想を覆す大傑作であった。
主人公の冴えない中年男が薬中のヴィッチ妻をヤクザに寝取られて一念発起、覆面を被ってヒーローになり、悪人を成敗していくというストーリーだ。なのだが、物語は勧善懲悪という定型文をぶち壊していく。自分に特殊能力が無いと悟った主人公は武器（レンチ）を手にとって悪人を殴打する。もちろん悪人たちは瀕死の重傷である。中年ヒーローは映画待ちの列でズル込みした小悪人にも一切容赦しない、殴打、だって悪だもの。いや、そりゃそうだけどさ、ちとやりすぎなんじゃね？正義っていったいなんだろな？
なんて思っているうちにヒロイン登場。エレン・ペイジが演じるぶっ飛び娘。中年ヒーローに輪をかけて性質が悪い。生粋の暴力好きである。悪であることを口実に敵を車で轢き潰し、「ヤッター」と無垢に喜ぶ。
「悪であろうと正義だろうと暴力は暴力」という従来の勧善懲悪型の物語がスルーしていた大前提を持ち出し、規定の物語の枠を破壊する傑作。エレン・ペイジが激マブ！！激マブ！！

・『野獣死すべし』
松田優作主演の映画を見たのはこれで２本目なんだけど、やばいですね、優作さん。狂ってます。あの気持ち悪さが極限までいって狂っちゃってる感じ、パラノイアっぽい感じ、凄いわ。もはや優作がいるだけでストーリーの整合性とかは全部ぶっとばしてもＯＫ、だって優作だから、みたいになってるもんね。

・『蘇る金狼』
これが始めて見た優作映画。なんでかなぁ、この時はいまいち分からなかったんだよね。長いなあとか、なんであんな部屋なの？というかどこら辺が「狼」なんだ？とかそんなことばっかり思ってた。残念。

・『兵隊やくざ』（第一～四作）
エッセイコーナーにて詳しく書いた。それにしても名作、そしてヤバイ魔力を秘めた映画だったな。

・『悪名』
「兵隊やくざ」においては勝新太郎はネコ（って言っても伝わらないか。同性愛における女役の方のことらしい）だったと思うんだが、「悪名」では男の中の男を演じている。やくざ役なんだけど、法律をやぶるとかそういう意識は全く無いのに、もう存在が違法みたいな、そんな根っからのアウトローなんだよね。男が惚れる男を見事に演じている。
あとね、特筆すべきはヒロイン役の中村玉緒だね。勝新太郎の奥さんなんだけど、可愛すぎる！さんまのからくりテレビに出ている現在の姿からは想像も出来ないくらいに、可愛すぎる。もやは天使だわ、あれは。

・『ドキュメンタリー オブ ヒロシ～空白の１５００日～』
　クソ、以上。というわけにもいかないんだろうけどさ、クソだよ、若干笑ったけどさ。よくテレビにありがちなドキュメントと銘打ったものの、ぜんぜんドキュメントではなく、かといってドキュメント風に「おちゃらけ」たその「おちゃらけ」が全然面白く作用しなくて興ざめな、そういうＤＶＤだったな。
　いやね、別にやらせでもいいんだよ、面白ければ。いってしまえば、すべての人間は生きている限り何らかの役回りを演じている訳だしね。面白くないんだよ、これじゃ。

－ドラマ－
・『ホタルノヒカリ』
　映画がやるらしく、テレビで再放送されているのを見たら続きが気になって、結局レンタルして徹夜で見てしまった。そのおかげで寝過ごし、双葉社のＥＳを書けなかった。綾瀬はるか、むっちゃ可愛い。このドラマ見たら恋したくなったわ、と柄にも無いことを言ってみる、が結構本気。やっぱりさ、世の若者が恋愛中毒的な症状に陥っている（様に俺には思われる。渋谷にいるカップルの大半はその交際に必然性無いだろ、って思うもん。いいもん、負け惜しみでもいいもん）のって、かなりの部分はテレビドラマに影響受けてる部分あると思うんだよね。

－パブー－
・Ｇｒａｓｓｈｏｕｓｅ
『下北沢浦路地ツアー』
　現実問題として下北沢が再開発の危機に瀕していることをこの小説を読んで知った。
　作中の登場人物たちが、それぞれがそれぞれの個性を持って活きている、ああいう感じってすごいなあ、って思った。特にツアー企画人の画家のお爺さんがよかったなあ。あと、幻のような蜃気楼のような日溜りのようなカフェ『閑話茶館』、その存在が大都会トウキョウに対しての下北沢を象徴しているような感じがして、なんとも素敵だった。
　この小説を読んで触発されて、『「ガード下」の誕生』小林一郎という本を買いました、まだ読んでないけど。

・天見谷行人
『たったひとりのアポロ１３』
　作品の冒頭に「忙しい人のための作品紹介～うつ病患者自身が書き下ろした初の本格小説～」というページがあって、住宅営業マンだった筆者が仕事の過酷さからうつ病を発症し再生していくまでを描いた小説である、と読者は理解してから物語に導かれていく。
　僕は私小説というジャンルが好きだし、自分自身もそれを書きたいと思っているが、久々に眼が覚めるような小説であった。読んでいるうちにグイグイと引き込まれる、いい小説であった。こんな風に言葉に血の通った文章僕も書けるようになりたい。

－雑誌記事－

・小島慶子

「私は男好きなのか、女性恐怖症なのか」

出典　新潮４５　２０１２年４月号

　アナウンサーの小島さんはずっと女子校だったんだって。で、この文章はその体験を下に、以下に女が陰湿で筆者がそれに辟易としているかについて書いてあるんだけども、その小島さんがウンザリしているもの、そのえもいわれぬ禍々しい感じ。それは桐野夏生の『グロテスク』に描き出されていた嫌な感じ、とそっくりだなあと思った。

・本橋信宏

「もはや絶滅危惧種!?アダルト業界の「今そこにある危機」」

出典　新潮４５　２０１２年４月号

　アダルト業界の現状について分析した丁寧なルポ。ＤＶＤの売り上げが落ちていることとかは予想してたけども、買い手の趣味趣向が以上に細分化されてきていて、作り手としては難しいという箇所は「なるほど」と思った。言われてみればやたらとシチュエーションを列挙した長ったるいタイトルのＤＶＤって結構な数あるもんな、と思った。

執筆者略歴

　本誌執筆陣のプロフィール。

・オパーリン
　１９８８年生（２４歳）。大学二年生の時、女にフられてばかりの学生生活に嫌気がさし、自分に都合のいいことしか起きない国を作りたいと思う様になり「王国計画」を構想。勝手に「オパーリン王国」を建国し独立。本誌『月刊　オパーリン王国』も「王国構想」の一環である。
　また、アマチュア小説家としても活動しており、過去３度「筑波学生文芸賞」に作品を投稿するも全て落選。「世の中が俺に追い付いていない」と負け惜しむ日々を送っている。過去の作品は電子書籍サイト「パブー」で電子化されており、無料で読むことが出来る。

・東町健太
　たぶん１９８７年生まれ（２５歳）。僕（以降、オパ）が４月生まれであるのに対して、彼は３月生まれなので学年は２つ上である。オパが記事に添えてプロフィールを書いてくれと頼んだところ「お前が適当に書いといてくれ」と断られたので、オパが知りうる限りの事を書いていきます。
　大学（文学部？）を中退後、ブラックな印刷会社で働くなど、身体を張った「文学」を行っている。
　オパとはかれこれ３、４年の付き合いになるだろうか。オパに文学と風俗のイロハを教える。オパが東京に帰省する度に会い、一緒に東京の町を散策する。
　現在は週刊漫画を印刷している工場で単調かつ過酷な労働を強いられている。本人いわく「脳が溶ける」そうだ。最近では昇進し、色々やる様になってきたそうです。

・弦楽器イルカ
　よく知らない人。気づいたら記事が掲載されていた。とりあえず隅っこに寄せて、少し泳がせてみることにする。

編集後記

ふむ、今月号はネタが集まらなくって「４０ページ位になっちゃうかな。ま、しょうがねっか」と思っていた。が、ラストに来て急遽盛り上がりを見せ、出来上がってみれば中々のボリューム、質（自負！）の一冊となった。その分完成が遅れたが、それはまあたいした問題でもあるまい。

今月号は予告編として「ＫＯＷ０７１文学賞」の第０回を掲載したが、実はもういっちょ予告したいことがあるので、この場を借りて書こうと思う。

次号予告！「お前、悩んでんだろ？」が第四回にして遂に最終回を迎える。次回は最終回ということもあって、特別にイルカさんと僕との対談形式にする予定である。そして、サブタイトルをつけた。「Ｙ売Ｋ人軍～そして日本人へ～」、つまり、来月の被害者は日本人である。お楽しみに！

と、予告させていただいた、っと。あとは、そうだね。今月号はいつも以上に色々な人に手伝ってもらった感がある。月オパ制作を手伝ってくれた皆さん、ありがとうございました。

そして、読んでくれた人にも、ありがとう。よーし、来月はどうしようかな。じゃ。

（２０１２年５月２日）

パブー版あとがき

　このパブー版のあとがきはね、毎回パブー版の編集が終わったときにその場の気分で書くようにしてる。今もそう。金欠でネットが止まったせいで、目標としている毎月１０日の発行から遅れること８日、現在１８日の３時４７分、「さーて、何書こうかな」なんて気分でこの文章を書き始めているわけよ。紙版の発行が５月２日だったから、出来てから２週間とちょっと、この４月号を完結させるべく書いているわけだ。皆さんがこの一ヶ月どう過ごしてきたか、知る由も無いのだが、僕の方は僕の方で、ここ２週間で色々あった。だから、紙版を発行したのが結構前のことのように感じる。ここ２週間で起きたとその成果はまた来月号に書き付けるから、ここには書かない。楽しみに待っていてね。
　パブー版の作成にあたって読み返してみると、中々にぎっしりと中身の詰まった一冊だな、と満悦な気分。自画自賛、自己満足、いやぁ、オナニスト冥利に尽きる一冊が出来上がってよかった。よくさぁ、気に入ったＣＤアルバムとかを評するときに「一個も「捨て歌」入ってないし」って言うじゃん。そう言っているときの様な気分。
　手前味噌ついでに僕が今本誌内に連載している小説『生き恥を～』について言及してみる。これはさ、書き始める段階から自分の中で結構しっかりと構想を練ってあったんだ。でね、先月号（三月号）まで（第三話まで）は助走的な部分で、今月号からやっと本番というか、そういう部分に入れた。小説内小説という試み。この小説は私小説のつもりで書いているんだけど、「小説を書いている自分」についての小説なんだ。
　小説を書いているときに常々感じていたことなんだけど、僕の書きつけている文字はどうやったて読者である「あなた」から、それが書き付けられている紙あるいは液晶のディスプレイ一枚で隔てられている。僕はいつもその薄皮を意識しているし、どうしようもなくもどかしい。また、小説と読者が薄皮一枚で絶対的に隔てられているのと同じように、書いた瞬間から、僕の書いた小説はそれを書いている僕と隔てられる。書いても書いても、小説は僕に追いつけない。
　『生き恥を～』では、その二つの薄皮に挑戦したいと思っている。そして、今ある自分の全てを書き尽くしたいと思う。そうすることで、僕の人生の一つの段階を完結させたいと思っている。この小説が完結したとき、この雑誌も一つの段階を終えると思う。書いてくれている執筆者の方々のあることなので、雑誌自体が完結するかどうかは分らないが、僕の中での位置づけとして確実にこの雑誌の一段階は完結するはずだ。
　と、今はこれ以上書けないけれど、この小説とこの雑誌の行く先は、僕の中でかなりはっきりとした輪郭をもって決まってきている。まあ、先のことなんて分りはしないんだけどね。一応予告しておこうと思って。
　以上、あとがきと予告でした。

月刊　オパーリン王国　２０１２年４月号

http://p.booklog.jp/book/50638

著者 : オパーリン
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/50638

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/50638

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.